

高知市民図書館蔵

「徳弘家資料」——資料目録並びに解題

- (一) 高知市民図書館蔵「徳弘家資料」目録
- (二) 高知市民図書館蔵「徳弘家資料」解題

信州大学教授 坂本 保富

(一) 高知市立図書館蔵「徳弘家資料」目録

A. 御觸控等史料

No	史料名	史料形状	史料年月日	備考
A001	御觸扣へ 徳弘孝藏	9枚綴 12×34	嘉永六癸丑九月 <small>ろ</small> 於東部	嘉永六年(一八五三)
A002	御觸写 徳弘氏	20枚綴 14×41 焼汚	嘉永七寅年	嘉永七年(一八五四)
A003	御觸扣へ	12枚綴 14×41 焼汚	安政元年十一月十三日ヨリ十二月廿六日マデ	安政元年(一八五四)
A004	御觸写 徳弘姓	16枚綴 14×41 焼汚	安政二卯ノ五月初旬ヨリ	安政二年(一八五五)
A005	御觸扣他一枚 徳弘姓	30枚綴 12×35 1枚物 28×38	安政三辰正月ヨリ 嘉永六丑年他	安政三年(一八五六) 嘉永六年(一八五三)
A006	御觸写帳 徳弘姓	28枚綴 14×41	安政四丁巳年三月初旬ヨリ	安政四年(一八五七)
A007	文武方廻文写帳	4枚綴 13×34 焼汚	安政四丁巳年三月初旬	安政四年(一八五七)
A008	文武方御觸扣 徳弘氏	12枚半綴 14×41 焼汚	安政五年年	安政五年(一八五八)
A009	御觸写帳 徳弘氏	22枚綴 10枚14×41 12枚14×41	安政五年年正月七日 <small>ろ</small>	安政五年(一八五八)
A010	御觸扣他一枚 酉年御觸帳 文書(御觸達)	56枚綴 14×41 1枚物 16×22 焼汚	安政六未正月ヨリ、安政七申正月ヨリ 八月十六日付	安政六年(一八五九)―安政七年(一八六〇) 安政七年(一八六〇)カ
A011	御觸帳	38枚綴 14×41 不揃	文久二戌年	文久二年(一八六三)
A012	御觸帳	9枚綴 14×41	文久癸亥年六月十四日 <small>ろ</small> 向々	文久二年(一八六三)
A013	朝比奈泰平ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	1枚物 16×17	四月十日付	御用書簡
A014	朝比奈泰平ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	1枚物 16×18	四月十九日付	御用書簡
A015	北御屋敷奥ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	1枚物 16×27 焼汚	五月廿八日付	御用書簡
A016	杉村十次、徳田勢五衛門ヨリ徳弘祥吉宛ノ書簡	1枚物 16×24 焼汚	六月八日付	御用書簡
A017	前野元四郎ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	1枚物 15×23	六月九日付	御用書簡
A018	寺田左右馬ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	1枚物 16×16	六月十七日付	御用書簡

A043	A042	A041	A040	A039	A038	A037	A036	A035	A034	A033	A032	A031	A030	A029	A028	A027	A026	A025	A024	A023	A022	A021	A020	A019
張紙	聞書	写(先年神奈川并於下田取結之重墨利加國條約)	大目付へ(日本惣船印は……………)	覺(野本辰次他御褒詞)	覺(弟子名簿)	被仰渡之分 槍術指南役取立他	御意書(御書付写)	覺	覺 「御風砲御用……………」	惣仲々間組付 今多内藏太他	覺	御書写	書簡 断片	小森喜八郎ヨリ徳弘潤吉宛ノ書簡	柏原内藏馬、青木忠藏ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	富山(御後様)ヨリ徳弘幸藏宛ノ書簡	村田仁左衛門ヨリ徳弘幸藏宛ノ書簡	山田忠衛門他ヨリ徳弘幸藏宛ノ書簡	崎村亀七ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	恩田淳三郎ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	森半五郎ヨリ徳弘孝藏宛ノ書簡	長瀬万治ヨリ徳弘幸藏宛ノ書簡	御納戸下役共ヨリ徳弘庄吉宛ノ書簡	来正克藏ヨリ徳弘祥吉宛ノ書簡
1枚物 14×106	1枚物 26×40 焼汚	1枚物 25×34	1枚物 17×30 焼汚	1枚物 15×80 後欠	1枚物 13×41 上部焼汚	1枚物 16×44 前後欠虫破レ	1枚物 16×60 前後焼汚	1枚物 14×116 焼汚	1枚物 14×28 部分焼汚	1枚物 16×59	1枚物 14×106 前半焼汚	1枚物 14×150	1枚物ヨリ6枚物マデ 焼汚	2枚物 16×8 16×14	1枚物 16×20	2枚物 16×18 16×47	1枚物 18×47 焼汚	1枚物 16×31 焼汚	1枚物 16×40 焼汚	1枚物 16×35	1枚物 16×33 焼汚	1枚物 16×21	1枚物 17×41	1枚物 16×37
文久三年(カ)		四月廿五日	七月	嘉永四亥五月二日	八月	日付不明	九月八日	未二月	文政七申ノ御供達伊野辺竹平他	寛政八辰年十二月	明和六丑ノ十月十一月朔月	明和五年正月廿八日 同廿八日写	日付不明	日付不明 前後欠	日付不明	日付不明	□月廿六日付	十二月付	十月廿二日付	十月十三日	十月七日付	十月七日付	十月五日付	九月廿一日付
文久三年(一八六三)カ	文久三年(一八六三)以降の史料			嘉永四年(一八五二)	藩文武方へ提出の写史料				文政七年(一八二四)	寛政八年(一七九六)	明和六年(一七六九)	明和五年(一七六八)	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡	御用書簡

A068	A067	A066	A065	A064	A063	A062	A061	A060	A059	A058	A057	A056	A055	A054	A053	A052	A051	A050	A049	A048	A047	A046	A045	A044
奉願口上覺	年行司役願書次第秘書	諸差出扣	差出	差出	江戸勤番諸差出扣	伏見御供名順	御家中分限帳	道中御茶場記	矢野御藏口火消口帳	御火消方諸用圍并諸御書諸覺圍	東海道宿々御本陣附(日本橋 大津)	寶曆三酉年正月六日	覺	左大臣從二位臣嶋津久光誠惶謹言	嶋津久光上言	臣恐惶謹疏	從來支配地惣高并現米惣高取調可申出事	御沙汰 行政官	廢佛ノ事	三職分課	御書写(慶應元年丑ノ十二月出ス)下記録	大目付へ	御意書(御書付写)	覺
德弘賀太夫	德弘祥吉	德弘祥吉	德弘孝太郎	德弘孝太郎		德弘百助		德弘孝光	德弘百助															
1枚物 25×39 焼汚	5枚綴 28×21	12枚綴 11×35	1枚物 26×37 焼汚	1枚物 26×38 焼汚	44枚綴 14×21 焼汚	1枚物 20×21	56枚綴 15×24 焼汚	26枚綴 12×17 焼汚	32枚綴 20×8 焼汚	10枚綴 11×13 焼汚	8枚綴 12×17 焼汚	1枚物 26×15 前欠	1枚物 25×12 焼汚	2枚綴 29×20 焼汚	1枚物 14×53 焼汚	3枚綴 39×20 焼汚	1枚物 27×38 部分	1枚物 14×39 部分	1枚物 27×20 部分	4枚綴 14×41 焼汚	3枚綴 17×20 焼汚	1枚物 17×30 後欠	1枚物 15×42 部分	1枚物 28×38 焼汚
五月	天保十亥年	天保二卯春三月	文政酉八年十一月廿日	西四月十五日(文政八年カ)	文化四卯年十一月	日付不明		天明五巳年三月十一日下り	天明式寅ノ四月廿六日ヨリ	安永三年四月十八日、十月朔月	辛巳(寶曆十一年カ)	寶曆三年	寛保二戌年九月十六日	明治八年十一月	明治八年十月	明治八年十月四日孝充再拜		巳六月十七日		慶應四年正月	慶應元年		元治元子年(カ)	元治元子年(カ)
	天保十年(一八三九)	天保二年(一八三一)	文政八年(一八二五)	文政八年(一八二五)カ	文化四年(一八〇七)		寛政三年(一七九二)―享和三年(一八〇三)頃カ	天明五年(一七八五)	天明二年(一七八二)	安永三年(一七七四)	寶曆十一年(一七六一)カ	寶曆三年(一七五三)	寛保二年(一七四二)	明治八年(一八七五)	明治八年(一八七五)	明治八年(一八七五)	明治二年(一八六六)―四年(一八七二)頃	明治二年(一八六九)カ	明治元年(一八六八)以降	慶應四年(一八六八)	慶應元年(一八六五)		元治元年(一八六四)カ	元治元年(一八六四)カ

A093	A092	A091	A090	A089	A088	A087	A086	A085	A084	A083	A082	A081	A080	A079	A078	A077	A076	A075	A074	A073	A072	A071	A070	A069	
文書断片	覺 奉願口上 断片	文書 断片	覺 下書	覺	申立扣	覺	覺	覺 惣場他	人夫割割役 山道達数他 部分	御留守居組諸差出扣	□都江差立當用扣	口上覺	白札御拔之□拔書	奉願口上覺 長崎御用達	願書	口上覺	奉願口上覺	奉願口上覺	奉願口上覺	奉願口上覺	奉願口上覺	奉願口上覺	杖御免御聞届	奉願口上覺	
德弘賀太夫	御持筒 德弘幸藏	百衛門ヨリ百助アテ		德弘庫助	德弘潤吉	德弘孝藏	德弘孝藏		德弘姓	德弘孝藏	德弘孝藏	德弘孝藏	德弘孝藏	西川三次郎	吉村馬喜助、德弘數之助	德弘孝藏	御持筒 伊与木楠次郎	御持筒惣代	御持筒 伊与木甚七	御持筒	德弘孝藏	德弘賀太夫	德弘賀太夫	德弘賀太夫	
1枚物	2枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	8枚綴	15枚綴	1枚物	16枚綴	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	
14×18	26×20 25×15	26×17	22×33	14×32 焼汚	27×63 焼汚	27×63 焼汚	14×40	14×72	15×74	28×21 焼汚	14×19 焼汚	14×64	24×16 焼汚	24×34 焼汚	13×75	13×75 焼汚	25×53	27×40 焼汚	28×40	27×39 焼汚	28×40 焼汚	19×34 焼汚	14×26	28×39	
日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	八月廿八日	日付不明	日付不明	明治二己巳年六月改	□□辰七月	午六月	安政五年写	安政三辰五月五日	日付不明	寅三月	子九月	子九月	子ノ九月		六月十五日	五月付	五月廿五日	五月廿二日	
										明治二年(一八六九)	慶応四年(一八六八)カ	安政五年(一八五八)	安政五年(一八五八)	安政三年(一八五六)	「私共儀当分御雇を以…」	安政元年(一八五四)カ	嘉永五年(一八五二)カ	嘉永五年(一八五二)カ	嘉永五年(一八五二)カ	嘉永五年(一八五二)カ	嘉永五年(一八五二)以降				

B009	B008	B007	B006	B005	B004	B003	B002	B001
②仁井田濱□□□□ 十四日 徳弘庫助他 ①於仁井田濱稽古打名順	於仁井田濱稽古打名順他(七種類の史料綴) 高島流西洋砲演技名録(一番—十三番) 土佐佐川	於仁井田濱大筒御検使打帳 徳弘百助	於武州橋樹郡大森村羽田高島流砲術打順帳 徳弘敷之助	分限帳 辰年写之 徳弘氏藏	八十封度 三十六封度 ホムカノン、サトイムモ ルチール十五トイムホウイスル、クウボールモル チール打様シ丁付書附	於武州橋樹郡大森村高島流砲術町打稽古打順業書	於佃島沖海上荻野流砲術火業船打稽古打順	於武州志村西臺徳丸原高島流砲術稽古業前
7枚綴 12×20 半分欠	1枚物 13×35 焼汚	11枚綴 10×29 焼汚	9枚綴 14×40	22枚綴 20×42 焼汚	7枚綴 17×25	8枚綴 16×42 焼汚	5枚綴 13×27 焼汚	1枚物 16×128
十四日	弘化三年(一八四六)	明和二年(一七六五)二月十九日	年不明 四月十一日分	弘化元辰年(一八四四)	嘉永七年三月	嘉永五年(一八五二)七月廿二日	弘化四年(一八四七)六月廿五日	弘化二年(一八四五)六月十二日
同上(岡田以藏他の徳弘門下が参加)	徳弘孝藏門下の土佐仁井田濱での西洋砲術試演記録	徳弘百助は幸藏の祖父(徳弘家三代、藩御持筒役)	下曾根塾門下の砲術試演記録(徳弘敷之助の記録)	下曾根の砲術門人帳を徳弘孝藏が下曾根塾で書写	嘉永七年(一八五四) 九州肥前国ソノギ郡に於ての高島流砲術稽古表(嘉永六年九月下旬に長崎の西川氏が書写、これを翌年三月に徳弘孝藏長男の敷之助が書写)	下曾根塾門下の砲術試演記録	弘化四年(一八四七) 下曾根塾門下の砲術試演記録	弘化二年(一八四五) 下曾根塾門下の砲術試演記録

B. 砲術稽古関係史料

A100	A099	A098	A097	A096	A095	A094
御觸達等 断片	覺 断片	御口述書面写他	文書 断片	文書 断片	奉願 断片	覺 下書 断片
1枚物 24×21 17×8 焼汚	1枚物 16×33 焼汚	6枚綴 14×37 焼汚	1枚物 26×16	2枚物 14×12 12×11	1枚物 13×40	1枚物 20×33
日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明	日付不明

B025	B024	B023	B022	B021	B020	B019	B018	B017	B016	B015	B014	B013	B012	B011	B010	B009				
若殿様諸師家 砲術御見分之次第	径俛帳	於仁井田濱口径十寸半忽微稽古打径俛帳 徳弘孝藏	於仁井田濱稽古打径俛帳	於仁井田濱稽古打之順 徳弘孝藏	打順帖 徳弘稽古場	径俛帳 徳弘庫助	於仁井田濱稽古打玉順口 徳弘稽古場扣(十二斤 コロニヤール御筒、十寸半ホライツスル御筒ヲ以)	勤怠縮 安政三辰ノ年正月九日及十二月六日迄 七月朔日及十二月六日迄	径俛帳 徳弘孝藏	濱稽古径俛覺	径俛帳	於仁井田濱西洋流砲術打順	於仁井田濱高島流西洋砲術稽古打順 徳弘數之助	於仁井田濱西洋流砲術稽古打順	入野濱大砲試發径俛帖 徳弘門人幡多社中(密秘)	⑦於仁井田濱	⑥業前順	⑤仁井田濱□□町打 二十四ポンドホウイツス ル	④仁井田濱寅八月九日十一日稽古打順	③仁井田濱打順
1枚物 24×34 焼汚	3枚綴 14×41	4枚綴 14×41	3枚綴 14×38、 焼汚	4枚綴 14×41	6枚綴 14×41	5枚綴 14×41	3枚綴 14×41	5枚綴 12×33	6枚綴 13×34	3枚綴 12×34	21枚綴 8×18 焼汚	8枚綴 13×34	6枚綴 13×35	6枚綴 14×41	8枚綴 14×39	1枚半綴 14×32	2枚綴 真中切レ	7枚綴 真中切レ	6枚綴 真中切レ	1枚物 14×34 真中切レ
安政四丁巳年(一八五七)十月廿三日カ	安政四丁巳年(一八五七)十月廿三日	安政四丁巳年(一八五七)十月廿三日	安政四丁巳年(一八五七)十月廿三日	安政四巳年(一八五七)十月廿三日	安政四巳(一八五七)四月 安政六未(一八五九)八月廿六日	安政四丁巳年(一八五七)四月廿一日	安政三辰年(一八五六)九月三日四日	安政三辰年(一八五六)	安政二卯(一八五五)十一月	安政二卯年(一八五五)十一月六日七日	安政二卯年(一八五五)正月吉祥日	嘉永七寅年(一八五四)八月十日十一日	嘉永七寅年(一八五四)正月中旬	嘉永七寅年(一八五四)正月四日、十五日	嘉永四亥年(一八五二)十一月吉日	嘉永式午(一八四九)乙酉十月十二日	日付不明	日付不明	寅(嘉永七)八月九、十、十一日	日付不明
若殿様とは第十三代藩主となる山内豊熙	同上(B022)と同一内容の砲術稽古史料	同上(B022)と同一内容の砲術稽古史料	同上(口径十寸半忽微稽古打)	同上(口径十寸半短和微砲ヲ以)	同上	同上(徳弘庫助は孝藏の次男)	同上	同上	同上	同上(参加門人名記載なし)	同上	同上	徳弘孝藏門下の土佐仁井田濱での西洋砲術試演記録	同上	同上	同上	同上	同上	同上(千頭勇馬他の徳弘門人が参加)	同上(徳弘庫助他の徳弘門人が参加)

B048	B047	B046	B045	B044	B043	B042	B041	B040	B039	B038	B037	B036	B035	B034	B033	B032	B031	B030	B029	B028	B027	B026
起證文 徳弘賀太夫	萬帳□□□□扣	當開仮扣 徳弘内蔵助	覺書(鐵製五十モルチール、他) 徳弘内蔵助手沢	袖扣 卷ノ下(直傳白鹿屯教練) 徳弘内蔵助手沢	袖扣 卷ノ上(野戦迦柄類矢位之事) 徳弘内蔵助手沢	西洋流御筒御道具圖并代金積 徳弘孝蔵扣	人馬帖 徳弘庫助	神秘録 14×20	差出断片 前後欠 15×24	御免許目録他写 30×43	ケール取扱掟 徳弘稽古場 11×34 焼汚	覺(大筒モルチル製作) 13×40	覺(大筒モルチル製作) 17×37	覺(口上覺) 14×40	覺(御願) 5片 焼汚	覺(借用願) 14×60	御筒御道具代渡方扣へ 14×20 焼汚	砲術弟子入門年月日并正年録 14×41	砲術修行面々差出年齢傳授扣 14×41 焼汚	題不明(名簿) 4片 前後欠 焼汚	弟子諸(名簿) 13×37 焼汚	二貫目中附牒 徳弘數之助他 2枚綴 14×41
1枚物	2枚綴 12×34 真中切レ	10枚綴 13×18	1枚綴 16×26	20枚綴 13×18	18枚綴 13×18	6枚綴 29×21 焼汚	表紙他18枚綴 14×20	5枚半綴 14×20														
天保十三年(一八四二)六月二十五日	安政三辰(一八五六)五月□□日	安政三辰(一八五六)二月	日付不明	安政三辰年(一八五六)正月	安政三辰年(一八五六)正月	弘化三丙午(一八四六)十一月	辰五月(安政三年)	天保十四癸卯年(一八四三)	日付不明	天保十四癸卯(一八四三)秋九月九日	安政三辰(一八五六)六月十六日	日付不明	日付不明	天保十二丑年(一八四二)―辰年(一八四四)	日付不明	日付不明	嘉永七寅年(一八五四)	安政六己未(一八五九)三月	安政卯年(一八五五)	嘉永元年(一八四八)他	天保十(一八四二)ヨリ安政三年(一八五六)マデ	日付不明(安政年間カ)
徳弘賀太夫(孝蔵)が下曾根に提出した起證文				同上	次男庫助が長崎で蘭人教官等から受けた西洋砲術関係の教授ノートメモ		次男庫助の長崎修行の折りの遊学記録			徳弘幸蔵が下曾根より授与された砲術免許目録他			徳弘孝蔵への土佐藩家老深尾相模からの大筒モルチル製作の依頼書の覚	徳弘孝蔵の下曾根入門を示す最初の史料	下曾根先生へ土佐藩からの贈物の願上の覚			藩文武方へ提出の徳弘門人名簿(門人六十四名を記載)	山田野地町徳弘市左衛門於稽古所修行方仕候人数	嘉永元年他の徳弘門人名簿	坂本龍馬等三〇九名の徳弘門人名が記載	

B068	B067	B066	B065	B064	B063	B062	B061	B060	B059	B058	B057	B056	B055	B054	B053	B052	B051	B050	B049
起證文 長山寛吉 嶋崎慶次 山本里丞	起證文 齊原治九郎	起證文 濱田市左衛門	起證文 太田亀十郎	起證文 健次(日下邑大工)	起證文 山本宗藏 山本直次 徳弘牛之助 上村善太郎 有澤熊太郎	起證文 嶋崎嘉平太	起證文 久保田小作	起證文 日野次郎	起證文 上村縫右衛門	起證文 吉良藤馬	起證文 上村茂七郎	起證文 嘉平(楠目村大工)	起證文 澁谷彌平	起證文 古澤八左衛門	起證文 那須源八	起證文 安達小藤次	起證文 倉知武太夫	起證文 近澤判左衛門 片岡機平	起證文 長屋六左衛門
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物
嘉永七年(一八五四)一月	嘉永七年(一八五四)一月二十六日	嘉永七年(一八五四)一月十二日	嘉永六年(一八五三)十二月二十五日	嘉永六年(一八五三)十二月二十日	嘉永六年(一八五三)十二月二日 嘉永七年(一八五四)一月五日	嘉永六年(一八五三)十一月二十三日	嘉永六年(一八五三)十月十七日	嘉永六年(一八五三)九月二十六日	嘉永六年(一八五三)九月六日	嘉永四年(一八五二)九月二十四日	嘉永四年(一八五二)九月二十三日	嘉永四年(一八五二)三月八日	嘉永元年(一八四八)六月二十五日	弘化二年(一八四五)四月十八日	弘化二年(一八四五)四月十五日	弘化二年(一八四五)三月二十四日	弘化二年(一八四五)二月十七日	弘化二年(一八四五)二月十五日	天保十五年(一八四四)十一月二十九日
																			以下の起證文は、徳弘孝藏に土佐藩門人が入門時に提出したもの。

B075	B074	B073	B072	B071	B070	B069	
起證文 酒井利右衛門	起證文 田口益之丞	起證文 一円源藏	起證文 森田專次	起證文 坂本才二(二通)	起證文 井上伸之助 奥村小十郎 酒井武平 毛利虎五郎 中屋隼助 橋本辰吉 小倉嘉吉 野本喜久馬 生駒美濃助 小倉源八郎 長尾猪之助 小笠原悅馬 小笠原龜吉 花井 泉 生駒清次	起證文 山内下総 桐間藏人 山内昇之助 深尾内匠 山内左織 桐間將監 深尾丹波	起證文 中田善右衛門 田村安平 長尾順次 倉田喜代次 津野惠藏
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	
嘉永七年(一八五四)三月四日	嘉永七年(一八五四)二月	嘉永七年(一八五四)二月	嘉永七年(一八五四)二月二十五日	嘉永七年(一八五四)二月二十五日	嘉永七年(一八五四)二月二十三日	嘉永七年(一八五四)二月十五日	

B087	B086	B085	B084	B083	B082	B081	B080	B079	B078	B077	B076
<p>起證文 山本三五右衛門 勝ヶ瀬多吉 浅見五郎平 平野村浅守衛門 和田源助 森寅之助 名和孫右衛門 長田源平 西川徳右衛門 長谷川竹馬 岡林辰馬 山本平八</p>	<p>起證文 桐間廉衛 桐間傳之助</p>	<p>起證文 酒井永馬</p>	<p>起證文 柴田備後</p>	<p>起證文 安田小十郎 渡邊盛治郎 林馬壽之助 生駒伊之助 孕石主税</p>	<p>起證文 山本森衛</p>	<p>起證文 所谷伊久丞</p>	<p>起證文 齋原庫之進</p>	<p>起證文 市川俊三郎</p>	<p>起證文 齋原覺之進</p>	<p>起證文 近藤才三郎</p>	<p>起證文 田口虎右衛門 田口爲五郎 佐竹彌三郎 田口常治</p>
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物
安政二年(一八五五)四月二十三日	安政二年(一八五五)四月二十三日	安政二年(一八五五)三月十三日	安政二年(一八五五)三月十二日	嘉永七年(一八五四)十月十七日	嘉永七年(一八五四)九月六日	嘉永七年(一八五四)閏七月二日	嘉永七年(一八五四)七月二十八日	嘉永七年(一八五四)六月	嘉永七年(一八五四)五月二十三日	嘉永七年(一八五四)四月	嘉永七年(一八五四)四月十一日

B091	B090	B089	B088	
起證文 中嶋藏之進	起證文 宗武竹助	起證文 酒井俊五郎 酒井明爾 大谷貞壽	起證文 山内主馬	沢本直右衛門 田所禮次 市川元六 竹村節之進 大槻近之丞 吉村磯平 山崎平次郎 杉原勝馬 中内和作 手嶋貞馬 市原民吾 矢野計七 沢田銘助 久川武右衛門 河野嘉市 佐和彦内 市川祐馬 増田盛次 市原信四郎 川瀬文之丞 中野吉平 中野克次 壽吉(足輕) 龜治(足輕) 清七(足輕) 幸作(足輕) 龜次(足輕) 力次(足輕)
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	
安政三年(一八五六)六月二十日	安政三年(一八五六)二月三日	安政二年(一八五五)十一月九日	安政二年(一八五五)七月十七日	

B115	B114	B113	B112	B111	B110	B109	B108	B107	B106	B105	B104	B103	B102	B101	B100	B099	B098	B097	B096	B095	B094	B093	B092
奥義誓詞 山内昇之助	奥義誓詞 山内下総	奥義誓詞 深尾内匠 深尾丹波	奥義誓詞 桐間將監 桐間藏人	奥義誓詞 古澤八左衛門	奥義誓詞 近澤儉藏	奥義誓詞 倉地武太夫	奥義誓詞 松木半次郎	奥義誓詞 長尾貞平	奥義誓詞 吉良忠之進	奥義誓詞 長屋助五郎	奥義誓詞 徳弘大吉	奥義誓詞 徳弘市左衛門	奥義誓詞 岡本辰馬	奥義誓詞 山崎省吾	奥義誓詞 吉良藤馬	奥義誓詞 上村茂七郎	奥義誓詞 猪野半平	奥義誓詞 嶋崎源四郎	奥義誓詞 那須源八(深尾相模内)	奥義誓詞 長屋六左衛門(添書同封)	奥義誓詞 徳弘賀太夫	起證文 嶋 與助	起證文 久右衛門(片地村民兵)
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物
嘉永七年(一八五四)六月十七日	嘉永七年(一八五四)六月十七日	嘉永七年(一八五四)六月十七日	嘉永七年(一八五四)六月十七日	嘉永七年(一八五四)二月	嘉永七年(一八五四)二月十五日	嘉永七年(一八五四)一月二十八日	嘉永六年(一八五三)十二月二十一日	嘉永六年(一八五三)十二月四日	嘉永六年(一八五三)十二月四日	嘉永六年(一八五三)十月二十三日	嘉永六年(一八五三)十月二十三日	嘉永六年(一八五三)九月四日	嘉永六年(一八五三)九月二日	嘉永五年(一八五二)一月十八日	嘉永四年(一八五二)十月十五日	嘉永四年(一八五二)十月十五日	嘉永四年(一八五二)十月八日	嘉永三年(一八五〇)十一月十六日	弘化三年(一八四六)二月十二日	弘化二年(一八四五)一月	天保十三年(一八四二)七月十三日	年月日不明	安政五年(一八五八)六月十五日
											徳弘修政(土佐和山の徳弘家)										徳弘孝藏が下曾根信教に提出した奥義誓詞		

B139	B138	B137	B136	B135	B134	B133	B132	B131	B130	B129	B128	B127	B126	B125	B124	B123	B122	B121	B120	B119	B118	B117	B116
奥義誓詞 松本加治馬	奥義誓詞 伊与木辰五郎	奥義誓詞 安岡小十郎	奥義誓詞 山田源左衛門	奥義誓詞 桐間廉衛 桐間傳之助 桐間安之助	奥義誓詞 桑原太七郎	奥義誓詞 佐々木竹之進	奥義誓詞 山内主馬	奥義誓詞 羽方常吾	奥義誓詞 楠瀬藤平	奥義誓詞 孕石主税	奥義誓詞 柴田備後	奥義誓詞 酒井利守衛門	奥義誓詞 酒井武平	奥義誓詞 酒井永馬	奥義誓詞 長山三吉	奥義誓詞 山岡利喜藏	奥義誓詞 武馬善六	奥義誓詞 内村彌平	奥義誓詞 片岡機平	奥義誓詞 德弘庄助	奥義誓詞 上村丹助	奥義誓詞 專當八十馬	奥義誓詞 新谷孫藏
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物
安政三年(一八五六)二月五日	安政三年(一八五六)二月五日	安政三年(一八五六)一月二十日	安政三年(一八五六)一月十四日	安政二年(一八五五)十月十三日	安政二年(一八五五)九月十一日	安政二年(一八五五)七月二十三日	安政二年(一八五五)七月十七日	安政二年(一八五五)六月二十日	安政二年(一八五五)六月四日	安政二年(一八五五)五月十日	安政二年(一八五五)四月二十八日	安政二年(一八五五)四月二日	安政二年(一八五五)四月二日	安政二年(一八五五)四月二日	安政二年(一八五五)三月二十日	安政二年(一八五五)二月二十一日	安政二年(一八五五)二月二十一日	安政元年(一八五四)五月二日	嘉永七年(一八五四)二月二十五日	嘉永七年(一八五四)十一月一日	嘉永七年(一八五四)十一月一日	嘉永七年(一八五四)九月十三日	嘉永七年(一八五四)八月十六日
					佐久間象山の西洋砲術門人桑原介馬の実父																		

C009	C008	C007	C006	C005	C004	C003	C002	C001
砲家秘函 卷之一、卷之二(写) 上野常足著	鈴林必携 上田亮章著、下曾根氏藏版	砲術語選 上田仲敏輯、山田重春著	増補 算法闕疑抄(二之卷)(書写) 磯村吉徳著	施條砲射擲表 全 池部春常著、高島藏版	施條砲射擲表 全 池部春常著、高島藏版	和蘭文典字類 全 飯泉士讓選、志筑高橋氏藏梓	書籍目録 徳弘孝藏	書籍及図類等目録 徳弘孝藏
39枚綴 26×18 焼汚	72頁 附9頁 19×9 焼汚	21頁 19×10	16枚綴 20×14 部分	11頁 11×18	11頁 11×18	70頁 19×13	1枚物(部分) 15×107	1枚物(部分) 15×68
刊行日付不明	嘉永五年(一八五二)壬子秋八月	嘉永二年(一八四九)春	寛文元年(一六六一)以降刊行	文久二年(一八六二)晩冬	文久二年(一八六二)晩冬	安政三年(一八五六)新鐫	刊行日付不明	刊行日付不明
砲術	砲術	砲術	和算	砲術	砲術	語学	蔵書目録	蔵書目録

C. 書籍写本等史料

B152	B151	B150	B149	B148	B147	B146	B145	B144	B143	B142	B141	B140
奥義誓詞 桑原太七郎	奥義誓詞 桑原介馬	奥義誓詞 千頭守之助	奥義誓詞 松本貫太	奥義誓詞 別役柳馬	奥義誓詞 秋澤清吉	奥義誓詞 上寫愛之進	奥義誓詞 島崎健助	奥義誓詞 中島藏之進	奥義誓詞 金松勇馬	奥義誓詞 渥美小藤次	奥義誓詞 坂本權平	奥義誓詞 嶋 與助
1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物	1枚物
嘉永元年(一八四八)十一月十三日	慶応二年(一八六六)二月二十一日	慶応元年(一八六八)十一月二日	文久二年(一八六二)三月二十六日	文久二年(一八六二)三月二十六日	文久二年(一八六二)三月二十六日	文久二年(一八六二)三月二十二日	万延元年(一八六〇)四月十九日	安政四年(一八五七)八月十五日	安政四年(一八五七)八月十五日	安政三年(一八五六)十月二十三日	安政三年(一八五六)九月七日	安政三年(一八五六)二月十七日
桑原介馬の実父	佐久間象山の西洋砲術門人										坂本龍馬の実兄	

C026	C025	C024	C023	C022	C021	C020	C019	C018	C017	C016	C015	C014	C013	C012	C011	C010
神器譜「卷二」 明の趙士禎著、清水赤城校、五卷五冊	神器譜「卷一」 明の趙士禎著、清水赤城校、五卷五冊	高島流砲術秘書 高島秋帆著	高島流砲術秘傳「卷二」(書写) 高島秋帆著	高島流砲術秘書「人」(全三冊) 高島秋帆著	高島流砲術秘書「地」(全三冊) 高島秋帆著	高島流砲術秘書「天」(全三冊) 高島秋帆著	硝石丘ヲ造ル法并煉硝石之法(書写) (高島秋帆著、蒙下會根先生免許写畢)	硝石丘ヲ造ル法并煉硝石之法(書写) (高島秋帆著、蒙下會根先生免許写畢)	エルンストヒュールウエルケン「卷十二」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷十一」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷十二」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷七」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷五、六」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷三」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「卷一、卷二」(書写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)	エルンストヒュールウエルケン「目録」(写) (セツセル著、名村元義譯「火攻精選」)
36頁 27×18 焼汚	52頁 26×18 焼汚	表紙他96枚 27×20	朱入 表紙欠22枚 20×18	表紙他22枚 27×19	表紙他39枚 27×19	表紙他32枚 27×19	表紙他17枚綴 27×19 焼汚	表紙他17枚綴 27×19 焼汚	45枚綴 27×19 焼汚	45枚綴 27×19 焼汚	40枚綴 27×19 焼汚	91枚綴 27×18 焼汚	64枚綴 27×18 焼汚	78枚綴 27×19 焼汚	71枚綴 27×19 焼汚	60枚綴 27×19 焼汚
文化五年(一八〇八)、京都植村藤兵衛刻	文化五年(一八〇八)、京都植村藤兵衛刻	弘化四年(一八四七)	天保十四年(一八四三)、徳弘益敬(孝藏)書写	天保十三年(一八四二)、徳弘賀太夫宛	天保十三年(一八四二)、徳弘賀太夫宛	天保十三年(一八四二)、徳弘賀太夫(孝藏)宛	天保十四年(一八四三)、徳弘孝藏書写	天保十四年(一八四三)、徳弘董斎(孝藏)書写	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	名村元義訳の刊行は天保十四年(一八四三)	最初の訳書刊行は天保十四年(一八四三)
砲術	砲術	砲術 「徳弘賀太夫ヨリ嶋與助宛」	砲術	砲術	砲術	砲術	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法	火薬製法

C045	C044	C043	C042	C041	C040	C039	C038	C037	C036	C035	C034	C033	C032	C031	C030	C029	C028	C027
施條砲使用法、卷二(一八五六年刊、野戦砲手学校附録)(徳弘孝輝・吉村真美共譯ノ手書譯稿カ)	歩兵使銃動身軌範「卷三」(書写) 鈴木春山校	歩兵使銃動身軌範「卷二」(書写、全三卷三冊) 鈴木春山校	煩礮学校(書名不明) 箕作阮甫繕	煩手学校(煩礮学校附録、書写) 箕作阮甫繕	柘榴玉(ケレナート)(書名不明、書写) 著者不明	西洋銃陣(書名不明、部分書写) 著者不明	官員建方并員數(書写) 著者不明	肩會(カタツガイ)(図入・部分書写) 著者不明	遠西武器圖畧 市川齋官譯、杉田成卿閱	稻富流砲術秘傳(書写) 著者不明	町見術 阿弧丹度用法略圖說 渡辺以親著	百機山斯經驗書(フランス軍人ベキサンス著、上中下三卷)「下卷」(書写)	百機山斯經驗書(フランス軍人ベキサンス著、上中下三卷)「中卷」(書写)	百機山斯經驗書(フランス軍人ベキサンス著、上中下三卷)「上卷」(書写)	福田派算函「卷二」 福田理軒著	明の趙士禎著、清水赤城校、五卷五冊 神器譜「卷五」	明の趙士禎著、清水赤城校、五卷五冊 神器譜「卷四」	明の趙士禎著、清水赤城校、五卷五冊 神器譜「卷三」
19枚綴 19×13 焼汚	表紙共30枚 26×19	表紙共53枚 26×20	表紙共30枚 26×19	表紙共53枚 26×20	43枚綴 26×20	14枚綴 12×33 焼汚	1枚物 27×38	3枚綴 12×33	16頁 25×17	6枚綴 12×17 焼汚	表紙他22枚 27×18 焼汚	表紙他39枚 27×19 焼汚	表紙他49枚 27×19 焼汚	表紙他31丁 16×11	33頁 26×18 焼汚	28頁 27×18 焼汚	17頁 27×18 焼汚	
刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	天保七年(一八三六)カ	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	嘉永五年(一八五二) 天眞樓藏板	天保十五年(一八四四) 徳弘孝藏書写	嘉永五年(一八五二) 都築氏藏板	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	刊行年月不明 順天堂塾より刊行の初版本	文化五年(一八〇八)、京都植村藤兵衛刻	文化五年(一八〇八)、京都植村藤兵衛刻	文化五年(一八〇八)、京都植村藤兵衛刻
砲術	兵書	兵書	兵書	兵書	砲術	兵書	兵書	兵書	砲術	砲術	測量	砲術	砲術	砲術	和算	砲術	砲術	砲術

C066	C065	C064	C063	C062	C061	C060	C059	C058	C057	C056	C055	C054	C053	C052	C051	C050	C049	C048	C047	C046
ドブウク(書写) 原著書[] [] 指揮入門]	ハツテレイ ケシキユツト ウ、ヘニング ハン 發着彈畧圖	ドンドロ製法	ドンドロ製法、ドンドロブールドル法附録	東海道中記并名所旧跡他 京美濃屋平兵衛板	種鳴秘傳 大町傳助宛 寛永四年六月四日	西洋流砲術手扣帳 嘉永六 徳弘敷之助	西洋流砲術手扣帳 嘉永五 徳弘敷之助	西洋流諸薬味秘法 初傳 徳弘孝藏	西洋流諸薬味秘法 徳弘孝藏より門人松本佐吉へ 伝授した免許状	西洋流火薬法(手帖) 書名不明	西洋砲術問書(書写) 書名不明 徳弘敷之助	西洋軍陣号令(書写) 書名不明 徳弘敷之助	拾匁筒撃様(断片、書写) 書名不明	施條砲圖説「二編」(第五―七表、譯稿) 徳弘孝輝・吉村真美共譯	施條砲圖説「初編」(第一表、譯稿) 徳弘孝輝・吉村真美共譯	施條砲圖説「初編」(表紙、図表欠) (徳弘孝輝・吉村真美共譯ノ手書譯稿カ)	施條砲圖説「二編」 徳弘孝輝・吉村真美共譯	施條砲圖説「二編」 徳弘孝輝・吉村真美共譯	施條砲圖説「初編」 徳弘孝輝・吉村真美共譯	施條砲使用法(部分)(一八五六年刊 野戦砲手学 校附録)(徳弘孝輝・吉村真美共譯ノ手書譯稿カ)
5枚綴 18×14 上部欠	1枚物 23×35 焼汚	1枚物 前後欠 18×14 焼汚	15枚綴 18×14 焼汚	12枚綴 11×15 焼汚	12枚綴 15×22	33枚綴 8×17	23枚綴 8×16	7枚綴 27×20	12枚綴 28×21	5枚綴 9×20	30枚綴 7×1	10枚綴 13×16 焼汚	1枚物 29×39 焼汚	12枚綴 18×14 焼汚	13枚綴 19×1	13枚綴 19×1	折本 表紙共23折 19×11	17頁 18×10	折本 22折 19×11 焼汚	6枚綴 19×13 焼汚
刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	享保十一年(一七二六)八月	嘉永六年(一八五三)	嘉永五年(一八五二)	日付不明	日付不明	日付不明	安政二年(一八五五)四月	年月不明	年月不明	文久三年(一八六三)前後カ	文久三年(一八六三)前後カ	文久三年(一八六三)前後カ	元治元年(一八六四) 高島秋帆藏板	元治元年(一八六四) 高島秋帆藏板	文久三年(一八六三) 高島秋帆藏板	刊行、書写共年月不明
兵書	砲術	火薬製法	火薬製法	地理往来	砲術	砲術	砲術	火薬製法	火薬製法	火薬製法	砲術	兵書	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術

D007	D006	D005	D004	D003	D002	D001
年譜	覺書 繪御用	勤事覺 董齋(繪御用)	嗜扣判物等入置品々覺	年譜書(元禄六四年—文政八酉五月迄)	年譜覺書(寛政四辰年—寛政六寅年迄)	年譜覺書(寶曆九卯年—明和四年迄)
德弘孝太郎	德弘董齋	德弘董齋		德弘祥吉	德弘百助	德弘百助
3枚綴 14×41	1枚物半紙横折13×30 焼汚	4枚綴 12×34	11枚綴 14×41	6枚綴 14×40	4枚綴 14×40	1枚物 16×93
文政六年—天保九戌戌年迄	文政二卯年—天保八酉六月九日	文政寅元年—天保九戌年二月	明和四年十月廿日—天保三辰年正月	文政八酉年以根居方扣写	寛政十午ノ年正月九日鉄御門御門番所改	明和四年(七六七)カ
文政六年(一八三三)—天保九年(一八三八)	文政二年(一八二〇)—天保八年(一八三七)	文政元年(一八一九)—天保九年(一八三八)	明和四年(七六七)—天保三年(一八三二)	元禄六年(一六九三)—文政八年(一八二五)	寛政四年(一七九二)—寛政六年(一七九四)	

D. 年譜覺書等史料

C082	C081	C080	C079	C078	C077	C076	C075	C074	C073	C072	C071	C070	C069	C068	C067
海岸砲墩の諸説明圖(第二、三、四、五図)	砲術書写(外国語)	砲筒圖(断片一—四)	砲筒圖(部分)	砲筒圖(部分)	鐵ガロナーデ 同臺、鏝モルテチール 同臺圖	二十四斤着發カラナアド	砲術他書写断片(一—一〇)	十二拇柘榴彈他(火爽紙寸法他)	教練号令圖圖註解	軍陣地關係(書写断片)	蘭語和解(書写)	野戰煩畧解 德弘潤吉(數之助)譯 草稿	横列教練命令抄(書写) 德弘敷之助カ	白鹿屯学「第一教一目他」(書写)	鐵炮秘函集(全) 岡本作右衛門ヨリ入澤半彌宛
4枚綴 27×38	27枚綴 15×20 焼汚	4枚綴 各々形状相違	1枚物(部分) 28×31	1枚物 28×40	1枚物 46×90	1枚物 18×24	10枚綴 各々形状相違書写	4枚綴 18×24 焼汚書写	3枚綴 17×47 焼汚	1枚物 12×31	9枚綴 27×20 焼汚	21枚綴 15×11	34枚綴 14×19 焼汚	22枚綴 12×17	30枚綴 26×19
書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	年月不明	年月不明	書写年月不明	書写年月不明	安政三年(一八五六)於崎陽写之	安政三年(一八五六)改稿	刊行、書写共年月不明	刊行、書写共年月不明	寛政十年(一八七九)十月二十五日書写
砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	砲術	火薬製法	兵書	兵書	語学	兵書	兵書	兵書	砲術

D031	D030	D029	D028	D027	D026	D025	D024	D023	D022	D021	D020	D019	D018	D017	D016	D015	D014	D013	D012	D011	D010	D009	D008
①本徳弘氏祈願所ノ圖	徳弘家先祖ニ関スル書及ビ圖(五部)	輝心院不幸之節扣	徳弘家墓 断片 □□先祖御義扣 徳弘孝基謹写	明治廿年迄ノ年數(忌日)	年譜断片	年譜断片	年譜断片	年譜断片	年譜断片	年譜	年譜書	年譜扣	御持筒御雇勤之支	年譜	年譜	慶應三卯年画御用且自平衛門ノ被頼候分覺	年譜并画御用附録並式冊	覺	覺	年譜書	年譜	年譜書	年譜
1枚物 26×36	8枚綴 14×40	11枚綴 20×20 菱形 焼汚	1枚物 28×16	1枚物 14×80	2枚物 26×9 23×9	1枚物 23×22 後欠	1枚物 25×16 前後欠	1枚物 25×19 前後欠	1枚物 24×20 前後欠	6枚綴 14×41	7枚綴 12×32 焼汚	9枚綴 14×41 不揃	6枚綴 15×40	4枚綴 26×20 焼汚	9枚綴 14×40	5枚綴 14×41 焼汚	9枚綴 17×25 2枚綴 21×28	1枚物 14×124	7枚綴 14×40	1枚物 後欠 14×226	6枚綴 14×41	10枚綴 13×41	5枚綴 21×16
	元治元甲子七月	安政六未年霜月御諾□□	年月不明	明治廿年カ	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	慶應三卯年カ	安政三辰年正月	嘉永二酉年十二月廿日ヨリ文久二壬戌年マデ	嘉永二乙酉年十二月廿日	明治六癸酉九月 初代十二代益孝迄	文政六未年 明治三午年三月九日迄	慶應三卯年	文政六未年 弘化三午年閏卯五月初旬迄	文政八酉七月五日 嘉永二酉年十二月	文化十二亥年 弘化四年	文化十二亥年 弘化三年八月迄	文政六未年 天保十三寅年迄	寛文四辰年 天保辰四月迄	文政六未年 天保十亥年極月十六日
	元治元年(一八六四)	安政六年(一八五九)		明治二十年(一八八七)						慶應三年(一八六七)(竹太郎は孝藏の孫)	安政三年(一八五六)	嘉永二年(一八四九) 文久二年(一八六二)	嘉永二年(一八四九)	明治六年(一八七三)	文政六年(一八三三) 明治三年(一八七〇)	慶應三年(一八六七)	文政六年(一八三三) 弘化三年(一八四六)	文政八年(一八二五) 嘉永二年(一八四九)	文化十二年(一八一五) 弘化四年(一八四七)	文化十二年(一八一五) 弘化三年(一八四六)	文政六年(一九二三) 天保十三年(一八四二)	寛文四年(一六六四) 天保十五年(一八四四)	文政六年(一八三三) 天保十年(一八三九)

D052	D051	D050	D049	D048	D047	D046	D045	D044	D043	D042	D041	D040	D039	D038	D037	D036	D035	D034	D033	D032	D031			
書簡 箕浦右源二筆	書簡 松田小節ヨリ	書簡 上岡ヨリ徳弘孝藏宛、梅軒ヨリ董齋宛	書簡 断片 徳弘孝太郎宛	書簡 八郎右衛門ヨリ徳弘孝太郎宛	書簡 耕斉ヨリ徳弘孝藏宛	書簡 國見森右衛門ヨリ徳弘孝藏宛	書簡 徳弘秀平ヨリ徳弘孝藏宛	繪入り書簡「徳丸ヶ原ト云処へ」 徳弘孝藏カ	道中萬仮扣 徳弘内藏助	横濱一條手扣 12×17	手扣帳 23×14 徳弘潤吉	日録断片(五月、六月、七月) 14×36 焼汚	孫の墓に詣て(他) 6枚綴 24×22 徳弘孝藏カ	覺(茶碗十人分他) 3枚半綴 14×39 中央切レ	心の友たち 20枚綴 25×17	備忘録 18枚綴 8×17	日記 44枚綴 20×14 徳弘孝藏	辛夷園書畫文房録 9枚綴 16×21	董齋雜録 天保七丙申初夏 27枚綴 14×20 焼汚	土佐國香我美郡立田村檢地帳(天正十六年八月) 4枚綴 25×20	⑤立田城ノ圖記 1枚物 26×36	④立田城ノ圖 1枚物 26×36	③立田城記(立田村史ヨリ) 1枚物 15×36 罫紙1枚	②天満宮社内旧記 1枚物 26×36
1枚物 14×53 前後欠焼汚	1枚物 24×34	1枚物 15×90	1枚物 14×36	1枚物 14×40	1枚物 17×81	1枚物 16×35	1枚物 14×53	1枚物 14×44 前後欠	10枚綴 13×17	4枚綴 12×17	21枚綴 23×14	1枚物 14×36 焼汚	6枚綴 24×22 徳弘孝藏カ	3枚半綴 14×39 中央切レ	20枚綴 25×17	18枚綴 8×17	44枚綴 20×14 徳弘孝藏	9枚綴 16×21	27枚綴 14×20 焼汚	4枚綴 25×20	1枚物 26×36	1枚物 26×36	1枚物 15×36 罫紙1枚	1枚物 26×36
五月十四日付	六月付	上岡「酷暑」、梅軒「五月雨」	八月十三日付	七月二十九日付	一月十一日付	嘉永三戌九月廿九日付	嘉永二酉正月十一日付	年月不明(天保年間カ)	安政三辰二月	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	天保十三寅八月廿二日ヨリ十五辰四月十日迄	年月不明	天保七丙申初夏	明治十二年九月七日香我美郡士族中内氏写				
						嘉永三年(一八五〇)	嘉永二年(一八四九)		安政三年(一八五六)								天保十三年(一八四二)―十五年(一八四四)		天保七年(一八三六)	明治十二年(一八七九)				

D076	D075	D074	D073	D072	D071	D070	D069	D068	D067	D066	D065	D064	D063	D062	D061	D060	D059	D058	D057	D056	D055	D054	D053
和歌五首	和歌八首 南都……	和歌二首 雨降りていと淋しければ……	金葉和歌集巻第一第二写	五尺の菖蒲他	発句 戌の年睦月のはじめ雪のふりけるころ	俳句 董齋	俳句 春興 部分	漢詩 断片	客中三日 贈美耶子隣 九洲岡龍透戦斗	東甌集撰摘 後欠	書簡 断片	書簡 断片	書簡 断片	書簡 断片	書簡	書簡 徳弘敷之助ヨリ徳弘庫助宛	書簡 徳弘敷之助ヨリ徳弘庫助宛	書簡 徳弘敷之助ヨリ祖母様母上様お里殿お鈴殿	書簡 徳弘敷之助ヨリ徳弘庫助宛	書簡 徳弘敷之助ヨリ祖母様母上様お里殿お鈴殿	書簡 徳弘敷之助ヨリ皆々様々殿	書簡 「中須賀身前ノ儀……」	書簡 坂本修平・吉村興次郎ヨリ長谷川萬平へ
1枚物 20×28	1枚物 27×34 焼汚	1枚物 12×11 部分	22枚綴 24×16	1枚物 16×107 前後欠	1枚物 19×15 焼汚	1枚物 21×25 焼汚	1枚物 13×25 焼汚	2枚物 14×36 14×12	1枚物 14×27 前後欠	野紙2枚 25×21	六部 14×28、14×22、14×14 14×13、14×12、14×7	三部 15×46、15×47、15×40	1枚物 15×33 焼汚	1枚物 28×25 前後欠	1枚物 28×40	1枚物 23×34 焼汚	2枚物 23×32 焼汚	2枚物 24×32 焼汚	1枚物 24×23	3枚物 24×35 焼汚	1枚物 23×34	1枚物 17×53 前後欠	1枚物 24×29 途中切焼汚
年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	天明七未年 在江戸	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	廿六日付	年月不明	八月四日付	□月十六日付	六月廿八日付	六月廿八日付	六月十五日付	十一月十八日付	元治元年四月廿五日以降
			「金葉和歌集」(勅撰和歌集、八代集の一)				天明七年(一七八七)																元治元年(一八六四)

D101	D100	D099	D098	D097	D096	D095	D094	D093	D092	D091	D090	D089	D088	D087	D086	D085	D084	D083	D082	D081	D080	D079	D078	D077
晝紙絹被頼名附	覺 卯年以來指引書 徳弘孝藏宛	衆儀講申合牒 徳弘祥吉	谷秦山諫言状 深尾若狭、同孫八江申渡	馭法起請文前書(書式)	土粥の製法 或官医の家法	習作 部分	雲室上人像 石厓畫 董齋記	丹頂鶴三羽の図	弘蔭ヨリ董齋宛 庚申端午一日	畫法に関する文章	習作	写山水訣他	晝筌 江上外史管重光著	文章断片教訓	文章断片	玄冠ニ掲ル号ヲ撰……………	水戸西山公御教文	釋門説ハ……………	谷氏所藏の真淵作歌他覺書	夢中に金比羅様御出現 寛政三辛亥年写 徳孝光	西畑人形芝居筋書 新開華月 表紙欠	夏日東海道中望富士山作歌并短歌 写	和歌 又からいもの御返し……………	五月廿日會 兼題夕顔他 董齋
7枚綴 14×40	1枚物 14×132	3枚綴 14×40	8枚綴 26×21	1枚物 33×46	1枚物 14×54	1枚物 15×25 焼汚	1枚物 14×12 焼汚	1枚物 21×136	2枚綴 20×17 焼汚	1枚物 28×40 前後欠	1枚物 28×98 焼汚	8枚綴 29×21 焼汚	罫紙6枚 24×16 焼汚	1枚物 23×24 焼汚	1枚物 20×26	1枚物 21×29	1枚物 16×56	1枚物 28×38	23枚物 24×16 焼汚	1枚物 22×39	27枚半綴 25×16	1枚物 25×30	1枚物 23×6	1枚物 20×31
年月不明	嘉永元年申年十二月改	天保七年	宝永三年十二月十日	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	庚申端午一日	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	寛政三辛亥年	大正十一年七月	年月不明	年月不明	年月不明
	嘉永元年(一八四八)	天保七年(一八三六)	宝永三年(一七〇六)						万延元年(一八六〇)								水戸西山公とは徳川光圀			寛政三年(一七九二)	大正十一年(一九二二)			

E019	草	董齋畫	紙 26×35	明治十三年一月一日	明治十三年(一八八〇)
E018	牡丹	董齋畫	紙 35×65	年月不明	
E017	梅	董齋畫	紙 135×30 下方破レ	年月不明	
E016	下會根金三郎 人物写生			年月不明	
E015	亀井小琴 墨梅			年月不明	
E014	松岡環翠 墨蓮			年月不明	
E013	春木南溟 紅梅に鶯			年月不明	
E012	春木南溟 亀の群			年月不明	
E011	春木南溟 鶴に日			年月不明	
E010	篠崎小竹 詩			年月不明	
E009	石川梧堂			保卯初冬(天保二年九)	天保二年(一八三一)
E008	頼 梅颯 初瀬にやどりたるあした			年月不明	
E007	春木南湖 為董齋雅友			年月不明	
E006	廣瀬臺山 病中偶作			年月不明	
E005	松岡毅軒 七言絶句			年月不明	
E004	徳弘董齋 墨山水			年月不明	
E003	松本弘蔭 秋野題作			年月不明	
E002	松本弘蔭 智鏡院の君より賜りたる扇			年月不明	智鏡院(土佐藩十三代藩主豊熙夫人)
E001	古屋竹原 墨竹			庚申閏卯月(万延元年九)	万延元年(一八六〇)

E. 書画類等史料

D105	人名録 断片	1枚物 19×41	年月不明	
D104	高知県立高等女学校々友會々報	17枚綴 13×19	大正四年紀元節	大正四年(一九一五)
D103	求友館起源	1枚物 24×38	年月不明	
D102	貢物等覺 断片	1枚物 23×10	年月不明	

E043	E042	E041	E040	E039	E038	E037	E036	E035	E034	E033	E032	E031	E030	E029	E028	E027	E026	E025	E024	E023	E022	E021	E020
ヤットコ	姥ノ面	尉ノ面	具足入レ 部分	印譜 渺鶴堂	印譜 前後欠	圖 北墨利加共和政治之内ワスヒングトン之湊蒸気船	□□(前欠) 船ニテ三丁斗遠ケテ見ル図	ペリー来航時の図	陣営図 ペリー来航時の久里浜陣営図	大阪夏の陣図 部分	大阪夏御陣備 忠義公御陣法	立石山水法 應永二年写	八幡太郎義家御刀之図	石洞琢漢学舎記	已卯立春後一日題白楽天詩	松村成美撰書 帆影樓記	勉屋書 颯影樓	壬生水石書 徳弘石門追悼	紫山樵史撰書	松田翠玉書	色紙 硯寄祝一首	聯	色紙 三十六歌選
1個 28cm、サビアリ	1枚	1枚	板2枚 55×9×8(厚さ)	1枚 20×122	折本8枚半 20×12	1枚 58×100 中央破レ	1枚 40×28	1枚 28×40	1枚 28×40	1枚 23×98	1枚 24×316 焼汚	1枚 27×169	1枚 27×76	10枚 25×11	板 60×8	1枚 32×116	1枚 26×50	1枚 45×33	1枚 27×34	1枚 32×18	1枚 18×15	2枚 62×7.5	36枚 16×15
年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	嘉永七寅二月十六日於鯨津御陣屋 辛夷園主	年月不明	嘉永六年癸丑八月二日	嘉永六年六月九日	年月不明	慶安二年三月	寛政十戌年五月五日に徳弘常次郎が再度写	安永七年写、寛政七年五月十二日写	□治七年一月	明治十二年カ	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	天保四年一月	年月不明	年月不明	年月不明
						嘉永七年(一八五四)		嘉永六年(一八五三)	嘉永六年(一八五三)		慶安二年(一六四九) 忠義公(第二代藩主)	心永二年(一三九五)、寛政十年(一七九八)	安永七年(一七七八)、寛政七年(一七九五)	明治七年(一八七四)カ	明治十二年(一八七九)					天保四年(一八三四)			

E049	E048	E047	E046	E045	E044
高知県立高等女学校	貝形ノ石	礫ノ様モノ	鉞石塊	金属塊	砲丸
11枚	1個 6×6×6(厚さ)	1個 7×7×3(厚さ)	1個 16×23 三角形	1個 経7cm位	2個 経10cm、4cm 空洞アリ
年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明	年月不明

M. 松田智幸氏蔵資料(高知市民図書館複写資料収蔵)

M009	M008	M007	M006	M005	M004	M003	M002	M001
御陣営圖	蒸気船圖	馬上炮圖 徳弘孝藏覚書	生兵教練(第三版、第五版)	ABC二十六文字及ローマ数字一覽表	アルコール製法(下曾根氏秘法)	砲術練習記録(九番―二十一番)	大砲稽古打記録	砲術用向通達書
1枚物 25×35	1枚物 18×25	1枚物 26×36	2枚物 25×35	1枚物 21×28	2枚綴 33×24	1枚物	1枚物	6枚綴 37×15
書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	書写年月不明	嘉永七年(一八五四)八月(於日比谷写)	年月不明	安政三年(一八五六)九月三、四日	□年正月廿六日
兵書 松田智幸氏所蔵史料の複写	造船 松田智幸氏所蔵史料の複写	砲術 松田智幸氏所蔵史料の複写	兵書 松田智幸氏所蔵史料の複写	語学 松田智幸氏所蔵史料の複写	化学 松田智幸氏所蔵史料の複写	砲術 松田智幸氏所蔵史料の複写	砲術 松田智幸氏所蔵史料の複写	砲術 松田智幸氏所蔵史料の複写

(二) 高知市民図書館蔵「徳弘家資料」解題——「徳弘家資料」の内容とその史料的价值

信州大学教授 坂本 保富

はじめに—幕末期の軍事科学を媒介とした洋学普及現象の歴史的意義

わが国が近世の江戸社会から明治の近代社会へと移行する歴史的な一大転換期となった幕末期には、歴史の表面を彩る政治的あるいは経済的な側面ばかりでなく、それらの基底や背後にあつて諸々の側面と連動して、学問や教育の世界においても極めてラディカルな変化が急激に生起していた。否応なく不可避的に、しかも本格的に西洋先進諸国と向き合わなければならなかった幕末期の日本が、僅々二〇年前後という極めて短期間の内に、近世的世界を脱皮して西洋型近代世界への移行をはかるに際しては、眼前に迫りくる西洋文明諸国をいかに認識すべきか、そして西洋文明の何をどのように理解し摂取して、いかに日本の目指すべき近代の国家像や社会像を描出するかは、まさに急を要する国家的な課題であつた。

かかる幕末期にあつて、従来の儒学を中心とした北東アジア文化圏に位置する日本の伝統的な学問や教育の世界の中に、極めて短期間に、しかも全国的なレベルにまで普及拡大した洋学教育と、それによつてもたらされた洋学知識のはたした歴史的な意味と役割は、実に大きかつたといえる。明治維新の欧化日本の渦中において、当時を代表する洋学者の一人であつた福沢諭吉（一八三四—一九〇一）は、わが国の幕末期における洋学（教育）の普及拡大過程を回顧して、次のように往時を述懐している。

抑も従前の蘭學なるものは専ら醫師の区域に止まり、或は窮理と云ひ或は本草と云ふも、畢竟醫道を脱すること能はず。又天文の學ありしかども、僅に數學の一部分たるに過ぎずして、國中に蘭學の及ぶ所甚だ狹隘なりしものが、兵事に関する譯書の世に出でしより、新たに道を士族社會の

中に開き、祖先以來孔孟の教えに育せられて鎖國の小天地に安んじたる守舊頑固の士族輩も、武術とあれば之に耳を傾けざるを得ず。即是れ蘭學流の入門にして、誠に新譯荷蘭の砲術書等を取て之を見れば、書中所記の一事一物、皆眞理原則の教に基づかざるものなくして、愈これを玩味すれば愈佳境に入り、最初は唯試に之を窺ふたる者も、一度び入りて更に返るを忘るゝのみならず、只管自家既往の迂闊を恥ぢて、恰も自から過ちを改むるが如くし、自ら改めて人にも亦勸告し、以て一時に蘭學流の流行を致したるは、尚武の日本士族に恰も適當したる武術を以て其入門を促がし、國中上流社會の心を收攬したるものにして、之を荷蘭の兵書翻譯の功力と云はざるを得ず。（中略）之を要するに寶曆明和以來八、九十年間の蘭學は、醫師を蘭學にしたるものなれども、弘化嘉永以後の蘭學は士族を蘭學にしたるものなり。本来日本の人口は三千何百萬と称して盛んなるが如くなれども、社會の上流に位して其表面に立ち治亂共に國事を左右する者は唯士族あるのみ。士族の好悪輕重する所のものは、他の人民も亦これを好悪輕重し、士族は喻へば國の主人の如きものにして、今この主人なる者が蘭學の結果たる武術を見て之に心酔する者多し、其學の區域の増大して勢力を得たるも當然の數なりと云はざるを得ず。爾後米英佛獨其他締盟國人の次第に渡來する者ありて、或は書籍器械を齎らし、或は學問藝術を傳へ、又或は我國の有志者が彼の國に行て傳習し聞見する所も少なからず。來往繁多、内外一の如くして、先生の歿後二十七年の今日と為りては、凡そ日本社會の兵事は勿論、政治學問商賣工業の事より日常衣食住の細に至るまでも大に趣を變じて、専ら西洋文明の風に従ひ、畜に醫師士族を蘭學にしたるのみならず、日本全國を擧げて西洋學にしたるは、時の勢とは雖ども、

其因て来る所の原因を求めれば偶然に非ざるを知るべし。即ち我國に行なはる、西洋の文明は始め醫に端を發して、中に士族に傳へ、終に全国に及ぼしたるもの⁽¹⁾。

この簡潔明瞭な福沢の洋学認識に象徴されるごとく、わが国における洋学の受容と展開は、隣国の清朝中国に勃發したアヘン戦争（一八四〇—一八四二）、そして嘉永六年（一八五三）六月の黒船来航という、欧米列強諸国の強力な軍事力を背景とした極東アジア地域への進出、いわゆる外側から一方的にもたらされた「西洋の衝撃（ウエスタン・インパクト）」を一大契機として、十九世紀中葉以降の幕末期に至って、質的にも量的にも大きく変容し転回した。それまでの洋学—蘭学は、先に福沢が指摘したごとく、医学を中心として薬学や本草学、あるいは天文学や曆法学などの専門分野で、一部の専門的知識人たちによって独占的に担われてきた⁽²⁾。だが、欧米列強の軍事的脅威が急速に昂揚する幕末期には、西洋諸国の圧倒的な軍事力を眼前にみて震撼した、本来的には職業軍人たるべき武士階層を中心とする人々は、西洋の軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）を主流とする洋学の中心的な担い手に変貌し、質と量との両面において洋学の新展開を担っていった⁽³⁾。このことは同時にまた、全国各地に軍事科学系の洋学私塾の勃興をもたらし、従来の医学系を中心とした各種の洋学私塾や、幕府諸藩の官公立学校をも取り込みつつ、幕末期における全国的な規模での洋学教育の普及拡大という、明治の近代以降に連続する教育近代化現象の生起を必然的ならしめた、とみることができる。

ところで洋学史研究において独自の見解に立脚して先駆的業績をあげた佐藤昌介は、かかる洋学の発展を三段階で捉え、幕末維新期に相当するアヘン戦争から明治維新の時期を第三の段階とし、その特徴を「蘭学Ⅱ洋学が権力側による軍事の近代化のために動員されたばかりでなく、明治以降の西洋学術受容の方向づけをした点」にあると指摘し、次のごとく論述している。

『解体新書』（二七七年刊）の訳述事業にはじまる、本格的な蘭学Ⅱ洋学の研究過程は、つぎの三期に分けられる。すなわち、第一期は文化初年（一八〇八年ごろ）を終期とするが、この時期の蘭学研究は、医学を中心とするものの、概していえば、百科全書的であり、専門分化するにいたっていない。この時期を代表する蘭学者は、杉田玄白・前野良沢および両者の門人大槻玄沢であるが、上記の傾向は、とくに前野良沢および大槻玄沢に顕著にみられる。第二期は、文化五年（一八〇八）にオランダ通詞馬場貞由が幕府に招致され、かれによって江戸に蘭文法が伝えられた結果、蘭学者の語学レベルが格段に高まり、学問の専門分化がようやく行なわれるようになった時期である。しかし、その反面、蘭学にたいし幕府の規制が加わり、シーボルト事件（一八二八）について蛮社の獄（一八三九）の洋学弾圧事件がおこったのも、この時期である。つぎに第三期は、一八四〇年にはじまるアヘン戦争から明治維新までで、この時期の特徴として、蘭学Ⅱ洋学が権力側による軍事の近代化のために動員されたばかりでなく、明治以降の西洋学術受容の方向づけをした点⁽⁴⁾があげられよう。

だが、かかる佐藤の幕末期洋学に関する思想的理解に対して、哲学者の古在由重は、「ヨーロッパの近代科学および近代技術は近代兵学をとおしてわが国にとりいれられなければならなかった。」と指摘し、幕末期の欧米列強の脅威にさらされて、風前の灯火と化した「祖国日本の独立」という危機的な歴史的課題に直面した日本が、西洋砲術や西洋兵学という西洋近代科学の技術的側面から洋学を受容したことは当然のことであり、国防という契機が洋学の全国的な広がりをもたらしたと分析し、次のように論述している。

高野長英、鈴木春山、佐久間象山らがそれぞれオランダの兵書を翻訳し、または兵器製作にさえあずかったのも、この民族的危機に面してのことだった。この際、それが体制維持か民族独立かのいずれの立場からなさ

れたとしても、この国防ということそのことが、各藩の粹をこえて全国的な規模にまでひろがらざるをえない必然性をその内部にひそめていたことは、いうまでもない。そしてまたこのおなじことが島国日本の視角から世界をのぞきみるにとどまらずに、「世界のなかの日本」という視野のひろがり⁽⁵⁾と民族的な自覚とをつよくもたらしたことも、容易に察せられるだろう。

幕末期の武士階層を中心とする多くの青少年たちは、国防的意識を契機に軍事科学の面から西洋世界に入り、その精緻で高度な学問文化に目覚めていく、という学習遍歴の軌跡をたどっていった。しかも彼らの多くは、単に当初の学習目標であった西洋の軍事科学技術の修得をもって足れりとはせず、さらに軍事科学に象徴される西洋諸国の文明開化を支えている様々な学問分野に進出し、より専門分化した洋学の学習を深めていくにいたった。かくして幕末期に洋学の学習を通じて西洋新知識を獲得した人々は、すでに幕末期においてはもちろん、明治維新以降の近代日本の中央や地方に適材適所の地位と役割とを得て、様々な分野で日本の近代化―西洋化の推進を担って先駆的な活動を展開していった。

このような幕末維新期の中央・地方における洋学の普及拡大現象を可能ならしめた洋学教育の展開という教育的現象に注目するとき、従来の教育史研究が研究の対象内に取り込んできたシーボルト (Siebold, Philipp Franz von; 1796―1866) の鳴滝塾や緒方洪庵 (一八一〇―一八六三) の適塾など、一部の著名な医学系洋学私塾の担った歴史的な役割、あるいは幕府諸藩が新設した洋学校や既存の官公立学校カリキュラムの中に洋学系諸科目が導入・拡大されるに至る教育現象などの歴史的な意味、などを看過することはできない。

だが、幕末期の洋学の普及拡大現象を数量的な観点からみれば、洋学学習者の全国的な広がりをもたらしたと考えられる中央・地方の軍事科学系洋学私塾は、上述の医学系洋学私塾や幕府諸藩の官公立学校での洋学学習者を数量的に

は圧倒的に凌駕し、それはたした洋学教育史上の役割や意味を無視することはできない。とりわけ西洋化を内実とする明治以降の日本近代化の推進過程において、最も肝心な人的要因の問題を考えるに際しては、洋学世界に大量の学習者を取り込んで行った軍事科学系洋学私塾の担った歴史的役割が、洋学史研究上においてはもちろん、教育史研究上においても冷静に認識され、その実態解明と歴史的評価が事実即して正当になされなければならない。

だが、幕末維新期の軍事科学系を含めた洋学の普及現象についての実態解明は、従来は医学や薬学、天文学や暦法学などをはじめとする広範な洋学史研究の諸分野において少なからず注目されてきた。が、これまでの医薬学や天文学、あるいは本草学や暦法学などを主たる研究領域とする洋学史研究においては、なおも軍事科学系の洋学研究は傍系的な位置に止めおかれてきたといつてよい。かかる洋学研究の状況に対して、幕末維新期における蘭学の地域展開に関する実証的研究を進めてきた田崎哲郎は、次のような問題提起をしている。

医学を中心とする民生的な蘭学の拡がりの流れに加えるに、幕末期に軍事科学的な面も増加をみ、両々相俟って発展したとみるものである。在村蘭学の量的発展は、その中から軍事科学にかかわるものを生み出してくる場合もあり、軍事技術の直接的訓練を受ける者には庶民出身者も少なくない。民衆的観点に立てば、その福祉の向上こそが第一であり、これは単なる技術史的視点からは出てこない判断である。また明治期とのつながりを考えるとき、生活の一貫性とそれに関わる在村的蘭方医の連続性をみるが、軍事技術については断絶が目立つようである。幕末洋学をみると、在村蘭学を充分に視野に入れつつ、軍事科学も把える必要があるのではなかろうか。⁽⁶⁾

上記の田崎の指摘は基本的には適切かつ妥当である。そこに指摘されること、従来の洋学史研究においては軍事科学系洋学の実態解明や歴史的意味づけ

などの研究は、極めて不十分であったといつてよい。しかしながら最近年には、前述のような田崎の問題提起に刺激されてか、主として洋学史学会あるいは日蘭学会の研究領域で、軍事科学を含めた洋学の地域的展開に関する本格的な研究への取り組みがみられるようになり、その研究成果も散見されるようになった。ただし、田崎は地域生活と密接した蘭方医学の明治以降の近代との連続性を指摘する一方において、「軍事技術については断絶が目立つ」と述べているが、この見解は少々、単純にして偏狭に過ぎる見解である。幕末期の西洋砲術や西洋兵学などの軍事科学は、明治以降の国家的軍事レヴェルでの西洋近代の軍事技術や軍事理論の本格的な導入の前提となり基礎となったもので、したがって連続性を認めることができる。その一方において、確かに幕末期の軍事技術そのものは、田崎の言うような民衆的観点での福祉の向上には連続しえなかつたであろう。だが、幕末期に西洋軍事科学から西洋世界に入って洋学の学習に向かつていった地方在住の多数の人々が、明治以降は地域のそれこそ「民衆的観点」での「民生」に関する殖産興業などの分野で、地域住民の生活の向上に深くかかわっていったことは否定できない。それ故に、幕末期の軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大現象は、国家の軍事的レヴェルばかりでなく、地域社会の殖産興業という生活的レヴェルにおいても、明治期以降の日本近代化過程に連続する現象であつたとみなければならぬ。

かかる洋学史研究の領域における新たな展開に比して、幕末期の洋学の普及拡大現象を可能にした洋学教育の展開過程、すなわち洋学教育の歴史に関する研究はいかなる状況にあつたであろうか。確かに、従来の教育史研究においても、幕末期の洋学教育の普及拡大現象が近世日本における教育近代化傾向の重要な指標の一つとして、その重要性が少数の研究者の間で認識されてきた。しかしながら、その後、洋学教育に関する本格的な教育史研究の成果が具体的に示されてこなかつたのは何故なのか。こと幕末期の洋学教育史に関しては、冒頭に引用した福沢諭吉の証言に尽きる自明のこととする安易な認識の故にか、あるいは皮相的な平和や人権を標榜する戦後民主主義社会における教育研

究とは相容れない軍事科学に密接する研究領域なるが故にか。しかし、従来の教育史研究において、軍事科学を含めた幕末期の洋学が全く無視されてきたわけではない。軍事科学系洋学私塾や幕府諸藩立学校のカリキュラムの中に軍事科学関係の学科目が導入拡大される過程を事態に則して解明しようとする研究が、一部の著名な医学系洋学私塾の研究や藩校研究の一部としての研究成果の中に示されてきてはいる。だが、それとて決して十分なものとはいえず、特に軍事科学系洋学私塾の実態解明やその歴史の意味づけに関しては、最近年に至るまで、ほとんど未開拓のままであつたといつてよい。

洋学史研究それ自体において軍事科学に關係する領域の研究の立ち遅れが指摘される状況の下で、その研究成果に一方的に依存して幕末期の洋学教育史を理解し描写してきた従来の教育史研究が、今後、幕末期洋学の教育的な展開過程の中に軍事科学系洋学私塾を正当に位置づけうる研究を促進することによって、教育史研究の自立性と主体性を確立し、逆に洋学史研究を含めた日本の歴史学界の発展に寄与しうる可能性もあるといつてよい。

幕末期における洋学教育の質的变化と量的拡大という教育現象の実態解明と、日本近代化過程にはたした洋学教育の歴史的な意味や役割に関する思想的な考察は、わが国の近世から近代に至る歴史的な転換期における世界観や学問観の革新、あるいはそれらのドラスチックな変化の影響を受けた人間観や教育観の転回、さらに大きな視点からみれば極東アジアの儒教文化圏にあつた幕末期の日本社会が、西洋近代の科学技術や学問文化をどのようなものとして理解し受容したのか、また、その過程において在来的な思想文化や学問教育との關係性をいかに意味づけしたのか、さらには、異質な文化を摂取する際に日本人の主体性の形成や確立という問題をいかにして可能ならしめたのか、等々の問題を、西洋との本格的な邂逅を外側から不可避的に迫られた幕末期日本側の対応状況に焦点づけて考察しようとするとき、それは単なる教育史研究という狭隘な研究領域や枠組を超えた、極めて学際的な研究課題であるといわなければならない。

一、幕末期の軍事科学系洋学私塾の実態解明と「徳弘家資料」

叙上のような問題関心から、わが国の幕末期における西洋砲術や西洋兵学などの西洋軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大過程に注目するとき、その教育的展開を担った先駆的な人物として、いわゆる高島秋帆（一七九八—一八六六）の名をあげることができる。周知のごとく、彼は、幕府公認の最初の西洋砲術家として幕末期における西洋軍事科学の普及拡大に端緒を開いた人物である。その彼が幕府当局の指示で西洋砲術の秘事を伝授した最初の門人が、幕臣の下曾根信敦（金三郎、一八〇六—一八七四）であり、次いで同じく幕臣の江川坦庵（太郎左衛門、一八〇一—一八五五）であった。幕末期に西洋軍事科学から洋学世界に入って西洋化学の専門研究に進み、明治の近代化学工業界の元勳と称されるに至った宇都宮三郎（一八三四—一九〇二）が、

當時御旗本で西洋砲術の大家は江川太郎左衛門、下曾根金三郎の兩家であつたが、諸藩の砲術家は右兩家の中の何れかの門人になつて居つた。私も下曾根の門人であつた。此兩家は互に負けず劣ずの勢であつた。⁽¹⁰⁾

と往時の西洋砲術界を回顧しているごとく、幕末期の西洋砲術・西洋兵学という軍事科学を内実とする洋学の普及拡大現象は、幕臣であつた高島門下の下曾根（膺徳館）と江川（繩武館）の両者の私塾を中心とした教育的活動によって社会的認知を獲得し、その後の急速な普及への確かな方向づけがなされたといってよい。

従来の洋学史研究を含めた歴史研究においては、高島と江川に関しては基本史料集の刊行とその分析に基づく一定の研究成果が示されてきた。だが、もう一人の下曾根に関しては、史料の根拠のない人物紹介程度の研究成果は若干みられたが、学術的レベルの研究成果とよべるものは全くみられず、ほとんど未知の状態におかれてきた。⁽¹¹⁾ そのことは、何と言つても下曾根の西洋砲術教授

の實際を物語る基本史料が発見されなかつたことが最大の理由であつたと考えられる。下曾根のように幕臣として幕府の要職を歴任して中央レベルで活躍した人物の場合でさえも、このように未知の状況にあつたが故に、さらに高島や江川、そして下曾根などの先駆的な指導者たちの私塾に全国各地から集つて学んだ数多くの門人たちが、帰藩後に地方レベルで展開した教育的活動の実態については、ほとんど未解明であるといつてよい。

このような従来の研究状況にあつて、幕末期の中央あるいは地方における西洋砲術や西洋兵学を媒介とした洋学の普及拡大過程を解明する上で、以下に紹介する下曾根門人の遺した高知市民図書館蔵「徳弘家資料」は、次の三点において第一級の基本史料として重要な意味と価値を有する歴史資料であるといつてよい。

一、高知市民図書館が所蔵・管理する「徳弘家資料」は、高島秋帆から最初に西洋砲術の秘伝を伝授された下曾根信敦の実践した私塾教育の実態を、土佐藩より藩費遊学生として江戸に派遣され初期の優秀な下曾根門人となつた徳弘孝蔵とその子息が、直接に記録した西洋砲術関係史料を多数含む貴重な資料群であること。

また下曾根塾での学習内容がそのまま土佐藩における徳弘塾の教育内容であつたと考えられ、それ故に徳弘塾での西洋砲術を中心とした洋学教育の實際を詳細に示す「徳弘家資料」は、これまで全く不明であつた下曾根塾の教授内容や教授方法、さらには同塾への入門者の實際を如実に物語る基本史料であること。

従つて「徳弘家資料」は、幕末期における中央・地方の先駆的な軍事科学系の洋学私塾における洋学教育の実態解明と、門人たちを媒介とした洋学の地方への普及過程という「洋学のタテの広がりや関係性」の解明に有効な基本史料といえる。

二、「徳弘家資料」は、江戸の下曾根塾で西洋砲術を修得した徳弘父子が、

帰藩後に土佐藩内で展開した西洋砲術教育の実態を示す史料が中心となっており、それ故に西洋砲術という軍事科学を媒介として土佐藩に洋学が普及する過程を具体的に指し示す基本史料であること。

従って「徳弘家資料」は、軍事科学を媒介とした洋学の地域的な展開過程を解明する基本史料であるといえる。

三、さらに「徳弘家資料」は、幕末期における同種の他の私塾との関係性の解明、例えば同じ高島秋帆から西洋砲術を伝授されて私塾教育を実践した江川坦庵の場合との比較、さらには儒学者として一家をなした後に江川と下曾根の両塾などで西洋砲術を学び、本格的な洋学研究に進んだ佐久間象山の場合との比較など。

特に象山の場合は、蘭語原書レヴェルでの洋学研究に進み、軍事科学を超えた領域にまで洋学理解を拡大し、やがてそれらの研究成果を、幕末期以降の日本近代化の指標となる「東洋道徳・西洋芸術」という思想に結実させた。そして彼は、その思想の実践的活動の場として私塾を開き、儒学教育と一体化した独自の西洋砲術教育を理論と技術の両面において展開した人物である。

かくして「徳弘家資料」は、江川や佐久間の私塾とともに、幕末期の軍事科学系洋学私塾の実態とその特徴の解明、さらには江川塾や佐久間塾に入門した土佐藩門人と土佐藩における徳弘門人との重複や相互関係性などを具体的に解明できる貴重な史料である。

すなわち「徳弘家資料」は、幕末期における軍事科学系の洋学私塾の相互関係性という「洋学普及のヨコの関係性」の比較解明にとつても貴重な基本史料であるといえる。

二、現存する「徳弘家資料」の内容

現在、高知市民図書館が所蔵する「徳弘家資料」とは、幕末期土佐藩の西洋砲術家で南画家でもあった徳弘孝蔵（一八〇七—一八八一）と、その門人でも

あった長男の数之助（孝輝）および次男の庫助（孝次）の父子三名が残した史料を主体とする膨大な資料群である。その徳弘家は、昭和の戦後まで土佐市城西中須賀に存続してきた。が、同家は、昭和五十五年十二月、不幸にも火災に遭遇して焼失。これによって同家の家系を継承してきた孝蔵の曾孫に当たる最後の親族も他界され、ここに徳弘家は途絶えてしまった。

幸いにも焼失を免れた同家秘蔵の一連の資料は、火災の翌年の昭和五十六年一月、高知市民図書館に「徳弘家資料」として移管された。間もなくして、当時、同図書館の郷土資料室に勤務されていた隅田迪子氏は、火災による破損の多い「徳弘家資料」の整理に着手され、優れた古文書解読能力を駆使して、丹念に史料の分類作業を進められた。その結果、ついに昭和五十七年四月、同図書館専用の野線紙に手書の「徳弘家資料目録」が出来上がり、この根気のいる作業は完了した。この隅田氏の地道な努力によって、孝蔵の没後是一部の地元関係者を除き、非公開史料として秘蔵されてきた「徳弘家資料」は、永い眠りから覚めて、研究者はもちろん一般市民の目にも触れることが可能となった次第である。筆者にとつては、文部省科学研究費助成金を受けて平成四年（一九九二）に着手した「幕末期の軍事科学系洋学私塾を媒介とした洋学の普及拡大過程に関する実証的研究」の具体的な研究事例の一つとして、この「徳弘家資料」の研究が位置づいている。かかる筆者の研究も、同女史の努力の結晶に負うところが大きく、感謝に絶えない。

ところで高知市民図書館が所蔵する「徳弘家資料」とは、徳弘孝蔵が明治十四年（一八八一）五月に他界した後、徳弘家に残された孝蔵父子を中心とする資料の一部であり、決して全体ではない。さらに前述の通り、徳弘家が火災に遭遇した際に多くの貴重な史料が消失あるいは焼損してしまった。そのためにもはや「徳弘家資料」の全体像を知ることが不可能となってしまった。しかしながら、焼損した資料を含めて、現在、高知市民図書館が保管する「徳弘家資料」の総数は五八一点を数える。なお、被災前に一部の史料が徳弘家から地元の関係方に譲渡されたといわれるが、現在、高知市民図書館の保管する

「徳弘家資料」の中には、高知市在住の幕末史研究者の松田智幸氏が私蔵する徳弘孝蔵関係史料の複写資料九点を加えられている。

さて、「徳弘家資料」といっても、その内容は焼損によって解説困難なものと原型のままのものがある。先にあげた隅田女史は、「徳弘家資料」の全体を次の七類に大別し、さらにそれら各類の中を内容別に分類し、各資料ごとに標題と各類内の通し番号を付して「徳弘家資料目録」を作成された。次に、まず「徳弘家資料」の全体像を知ることができるよう、隅田女史の作成された「徳弘家資料目録」を基本にして、筆者が加筆修正した「徳弘家資料」の概要

「徳弘家資料」の概要

A. 御触控等史料 (一〇〇点)	①御触扣等 (十二点)	②御用書簡類 (十八点)
	③御書写等 (二十四点)	④覚書差出等 (四十六点)
B. 砲術稽古関係史料 (一五二点)	①国外関係 (六点)	②土佐藩関係 (十八点)
	③名簿類関係 (四点)	④覚書他 (十七点)
C. 書籍写本等史料 (八十二点)	⑤起證文関係 (四十六点)	⑥誓詞奥書類 (五十九点)
D. 年譜覚書等史料 (一〇五点)	①年譜 (二十六点)	②先祖関係 (六点)
	③日記類 (十一點)	④書簡 (二十二点)
E. 書画類等史料 (一三六點)	⑤詩和歌他 (四十點)	
	①扇子 (十六点)	②画 (三点)
F. 焼損分等史料 (計六袋)	③書 (十點)	④写 (八點)
	⑤印譜 (二点)	⑥物 (九點)
F. 焼損分等史料 (計六袋)	⑦繪葉書 (八十八點)	
	①砲術関係 (二袋)	②軍事関係 (一袋)
	③書籍関係 (二袋)	④年譜関係 (一袋)
以上、総計五八一点		

を示しておく。

三、「徳弘家資料」の内容と洋学教育史研究上における価値

(1) 下曾根塾および徳弘塾の教育実態を示す西洋砲術関係の史料

膨大な量の「徳弘家資料」の中で、幕末期における軍事科学系洋学私塾を媒介とした洋学の普及拡大過程の解明という教育的な観点から最も注目される史料は、「B. 砲術稽古関係史料」である。それは、下曾根信敦が江戸に開設した西洋砲術塾での教授記録と、そこに土佐藩から派遣された徳弘父子が西洋砲術の免許取得後に帰藩し、郷里の土佐に開設した西洋砲術塾での教授記録である。それらの諸史料は、アヘン戦争直後の天保年間から明治維新直前の慶応年間にかけての幕末期における、中央と地方の二つの西洋砲術塾の実態を示す史料群である。それらは分類上、史料名が「砲術稽古関係史料」とされてはいるが、単に「砲術稽古」の実態のみを示す史料ではない。そこには両塾における西洋砲術教育の内容や方法、入門者の出身地や身分・年令、さらには修業期間や修得内容などが詳細に記録されており、まさに幕末期における西洋砲術塾の教育実態とその中央・地方への普及過程を極めて具体的に指し示す貴重な史料群である。

このような歴史的な意味をもつ「B. 砲術稽古関係史料」は、全体で一五二点を数える。その内訳は、「国外関係 (六点)」「土佐関係 (十八点)」「名簿類 (四点)」「覚、その他 (十七点)」「起證文関係 (四十六点)」「誓詞奥書類 (五十九点)」となっている。そこに「国外関係 (六点)」とは、土佐国外すなわち江戸において下曾根が主宰する西洋砲術塾に関する史料であることを意味する。また、「起證文関係 (四十六点)」は、いわゆる入門者の「門入証文」であるが、そこには徳弘孝蔵自身の下曾根塾入門時の「起證文」を初めとして、下曾根塾と徳弘塾への土佐藩関係の入門者一二九名の姓名と各自の身分や年齢を確認することができる。同様に、西洋砲術に関する一定の学習内容を修得して免許を授与される際に、門人たちが師匠に差し出した誓約書「誓詞奥書類 (五

十九点」においては、合計六十四名の門人と各自が受領した西洋砲術免許状の種類を確認することができる。

以上のような史料を解説分析することによって、江戸という中央に開設された下曾根塾と、土佐という地方に開設された徳弘塾における、西洋砲術や西洋兵学という西洋軍事科学の教育実態を具体的かつ詳細に解明することができる。そこから幕末期における西洋砲術教育の性格や内容、さらには幕末期の中央・地方における西洋砲術の伝播状況などを窺い知ることができる。

(2) 幕末期西洋砲術家の洋学知識を示す書籍写本史料

次に、「徳弘家資料」の中の「C. 書籍写本等史料」であるが、これによって徳弘孝蔵と彼の息子たちの西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）を中心とした洋学知識がどの程度の内容であったのか、また、その水準は幕末期の洋学世界においてどの程度のレベルにあったのか、などの諸点を考究することができる。それ故に「C. 書籍写本等史料」は、下曾根塾や徳弘塾の教育内容や教育水準を示唆してくれる貴重な史料である。

具体的に「C. 書籍写本等史料」の中身をみると、当然のことながら、そこには『和蘭文典(字類)』（前編、安政三年、飯泉士讓撰）や『蘭語和解』（安政三年筆写の写本）など、いわゆる蘭語学習のための語学入門書が含まれている。周知のごとく、これらは当時の蘭学を通して西洋砲術あるいは西洋兵学などの西洋軍事科学を学ぶ上で不可欠の前提となるオランダ語の学習書であった。次いで肝心の西洋砲術関係書としては、西洋の度量や坪量についての制度や内容に関する知識を示した『砲家秘函』（三冊中の二冊の写本、上野常足著）、砲・弾丸・陸用カノン・海岸砲・臼砲・手銃・大煩発射試効表・手銃射法・火薬略説などを内容とする西洋砲術書『鈴木必携』（嘉永五年、上田亮章訳編）、西洋砲術に関する蘭語の基礎語彙集である『砲術語選』（嘉永二年、上田伸敏編）、内容的にはオランダ砲術書の翻訳と思われる火薬・砲弾・火工品についての概略を記述した高島流砲術伝書『高島流砲術秘書』（全三冊、天保

十三年）、江戸時代初期の砲術家である稲富直家の創始した『稲富流砲術秘伝』（天保十五年の写本）、カノン砲・カルロンナーデ砲・臼砲・歩兵銃・騎兵銃・ピストル・サーベル・砲車・砲台などを図解した西洋砲術の図解書『遠西武器図略』（市川斎宮訳、嘉永五年）や『西洋砲術聞書』（安政二年）、装薬量における仰角ごとの再交距離と経過時間を表にした『施條砲射擲表』（文久二年、池部春常訳撰）、西洋砲術書を基にして中国兵書に訓点を施した『神器譜』（五冊、趙士楨著、清水赤城校）、フランス海軍のカノン砲実験報告書『百機山斯経験書』（仏軍人ベキザンス著、三冊写本）等々がある。なお、この西洋砲術関係書の中には、徳弘孝蔵の長男・数之助が同藩の吉村賢次郎と共訳した『施條砲図説』（高島蔵版）の「初編」（文久三年）や「二編」（元治元年）も含まれている。

さらに西洋兵学関係書としては、オランダの歩兵教練書とみられる『歩兵使銃動身軌範』（写本、箕作阮甫繙、鈴木春山校）や『西洋軍陣』（写本）、『西洋軍陣号令』（写本）、『野戦煩略解』（草稿、徳弘潤吉訳、安政三年改正）、『横列教練命令抄』（写本）、『教練命令図画註解』（三枚）など、各種の西洋兵学関係の写本や翻訳草稿がある。

また、砲術や兵学の理解に不可欠な理化学関係書としては、まず砲筒の角度計算や弾道計算などに必要な数理書関係では『増補算法闕疑抄』（写本）や『福田派算函』（福田理軒著、順天堂塾刊）、さらには航海用の天体観測用測角器（オクタント）を地上や海上での近距離測定の測角器として使用する際の方法を説いた『阿狐丹度用法略図説』（嘉永五年、渡辺以親著）などが確認できる。さらに火薬の調査に不可欠な化学書関係では、『硝石造ル法並煉硝石之法』（高島秋帆著の写本）、『西洋流諸薬味秘法』（徳弘孝蔵が門人に与えた火薬製造免許状）、『西洋流火薬法』（手帖）、火薬や弾丸の製造や設備あるいは火薬貯蔵法などの軍用火工科学に関する翻訳書『エルンストヒュールウエルキ』（写、名村元義訳『火攻精選』）、ドンドル銃（傍装雷管銃）の製法やそれに必要な火薬製法などを記した『ドンドルゴート製法、ドンドルブードル法附録』（写本、

火薬劑製法)、あるいは『アルコール製法』(下曾根氏秘法の写、嘉永七年)などがある。

以上に紹介した書籍や写本を含めて、「書籍写本史料」は合計八十二点の史料を数える。それらの多くは、蘭語学習や西洋軍事科学(西洋砲術や西洋兵学)に関するものである。だが、そこで注目すべきは、西洋の砲術や兵学などの軍事科学の知識技術を理解する上で、数理関係や理化学関係の科学的知識が不可欠のものと認識され、それらに関係する書籍や写本が多数含まれていることである。このことは、幕末期における西洋砲術塾の教育が、単なる砲術や兵学に関する操作技術を訓練教授するにとどまらず、精緻で巧妙な知識技術を支えている西洋科学の学問的な理解にまで及んでいたことを物語っている。それ故に、福沢諭吉が

守舊頑固の土族輩も試に新譯荷蘭の砲術書等を取て之を見れば、書中所記の一事一物、皆眞理原則の教に基づかざるものなくして、愈これを玩味すれば愈佳境に入り、最初は唯試に之を窺ふたる者も、一度び入りて更に返るを忘るゝのみならず、只管自家既往の迂闊を恥ぢて、恰も自ら過ちを改むるがごとし⁽¹²⁾

と回顧しているわけである。

徳弘孝蔵とほぼ同時期に、江戸の西洋砲術界で活躍した佐久間象山(信州松代藩、一八一―一八六四)は、幕府の昌平坂学問所頭取を勤めた佐藤一斎門下の儒学者として早くに一家をなしたが、壮にして高島流西洋砲術家の江川坦庵門人となって西洋砲術を修得し、さらに研鑽を重ねてオランダ語をもマスターし、蘭語原書の読める洋学者として名声を馳せた。その彼が、江戸に開いた西洋砲術塾には、全国各地から入門者が殺到した。その多くが武士であり、しかものアヘン戦争後から黒船来航前後に昂揚する外圧の危機感から、武士本来の国防意識に目覚めて入門する、というのが一般的な入門動機であった。吉

田松陰(一八三〇―一八五九)や勝海舟(一八二三―一八九九)はいうに及ばず、維新後、明治の司法界に重きをなす津田真道(津山藩士、一八二九―一九〇三)、あるいは初代の東京大学総理となった加藤弘之(出石藩士、一八三六―一九一六)たち。彼らにとって、象山塾への入門目的は、明らかに軍事科学たる西洋砲術や西洋兵学の知識や技術の習得にあつた。かかる当時の象山塾への入門者たちの入門動機や意識、および彼等を受け入れて指導する象山の「東洋道德・西洋道德」思想に基づく教育方針を、山本有三の戯曲『米百俵』の主人公として有名になった小林虎三郎(長岡藩、一八一―一八七七)と同じ嘉永四年(一八五二)に象山塾に入門し、維新後は文部大書記官を経て華族女学校長を勤め、宮中顧問官や貴族院議員等を歴任した西村茂樹(佐倉藩、一八二八―一九〇二)の書き残した次の一文は、端的に表現している。

佐久間の門に入り砲術を學ぶに及ぶに象山余に謂て曰く、砲術は末なり、洋學は本なり、吾子の如きは宜しく洋學に従事すべし、余の如きは(象山自ら云ふ)三十二歳の時始めて蘭書を學べり、吾子は余の學べる時に比すれば年猶若し、必ず志を起こして洋學を勉むべしと、余謂へらく余今西洋砲術を學ぶといへども其意は攘夷護國に在り、已に其術を得れば足れり、敢て彼の書を讀むことを要せず、道德政事に至りては東洋の教は西洋の上に在るべしと、故に初めは象山の言を以て然とせざりし⁽¹³⁾。

まさに幕末期の西洋砲術教育は、当初は西洋軍事科学の成果としての単なる知識技術の習得のみを目的に入門した青年たちが、そこからさらに様々な分野や領域の西洋科学に進みうる可能性を有していたことを十分に窺わせる。それ故に、今日においても砲術研究や軍事史研究の関係者は、砲術の修得や研鑽の意義を次のように説明している。まさに「徳弘家資料」は、そのことを如実に物語っている具体的な資料であるといつてよい。

砲術の研鑽は、単に射撃術の錬磨にとどまらず、科学的武器として銃砲火薬の研究と火戦法を勉強しなければならぬ。よい火器を製造するには、化学、冶金、機械工業などの知識と技術が必要であり、またその用法には、数学、測量、気象などの学問も欠かすことができない。

しかも火器の威力は、軍事上はもちろんのこと、政治社会の変革にも重大な影響をおよぼすものである。ゆえに砲術史（銃砲史）の研究は、単なる軍事史の一環にとどまらず、科学史、技術史、ひいては広く政治文化史を探究する上に大きな基柱となるものと思われる。¹⁴

おわりに

以上、高知市民図書館が所蔵する「徳弘家資料」の内容とその洋学（教育）史研究上における意義について述べた。同資料は幕末期日本において発達した軍事科学系洋学私塾の教育実態を解明し、その中央・地方への拡大普及過程を直接的かつ具体的に物語る貴重な資料である。この六百点近い「徳弘家資料」を丹念に解読し分析していけば、これまでの教育史研究においてはもちろん、洋学史研究を中心とする日本の歴史学界においても未開拓な分野であった幕末期の軍事科学系洋学私塾の実態が具体的に解明され、従来の医学系その他の私塾や幕府諸藩の学校を含めた幕末期洋学の教育的な展開過程、すなわち洋学の普及拡大過程に関する教育的な全体像を解明する上で、大きな手掛かりを与えてくれることになるであろう。

近年、地方レヴェルにおける洋学私塾の実態解明が進められ、洋学史研究に新たな活気が蘇り、それによって従来の幕末期洋学私塾の典型とされてきたシーボルトや緒方洪庵などの個別的な私塾研究の敷衍による総論的な幕末期洋学理解のパラダイムが革新されつつある。¹⁵しかしながら、そこでもなお西洋近代科学の成果である西洋砲術や西洋兵学などの軍事科学に関わる洋学私塾の存在と、その歴史的な意味や役割については旧態依然として等閑視されている。

元来、幕末期洋学の内実を具にみると、それを医学系と軍事科学系とに峻別

すること自体が不可能なことであり、両者は性格や内容などの点で、あるいはそれを担った人的側面において、極めて密接不可分な相互関係性を有していた。このような幕末期洋学の特徴を理解した上で、医学系洋学私塾の地方レヴェルでの実態解明を進めると同時に、幕末期の中央・地方における軍事科学系洋学私塾の実態もまた解明されなければならない。そうすることによって初めて、幕末期における洋学の量的拡大と質的変化の全体像、すなわち幕末期における洋学を巡る否定から肯定へ、それも消極的な受容から積極的な導入へと情況が変貌し、全国的な規模で急速に普及拡大していった過程とを闡明することができるといえる。

(注)

(1) 『福沢諭吉全集』第十卷（岩波書店、昭和三十五年六月）所収の「明治十八年四月四日梅里杉田成卿先生の祭典に付演説」（同書二五〇—二五三頁）。

(2) 緒方洪庵の適塾門人で塾長を勤め、維新以後は文部医務局長や内務省衛生局長などの重責をになった長与専斎（一八三八—一九〇二）は、自らの適塾時代を回顧して、

元來適塾は醫家の塾とはいえ、その實蘭書解読の研究所にて、諸生には醫師に限らず、兵學家もあり、砲術家もあり、本草家もあり、舎密家も、およそ當時蘭學を志す人はみなこの塾に入りてその支度をなす」（『松香私志』平凡社、一九八〇年）

と述懐している。筆者は、幕末期に西洋砲術や西洋兵学などの西洋軍事科学の技術的修得を目的として、軍事科学系洋学私塾に入門して洋学と出会った青年たちが、その後の幕末維新期における日本近代化過程の中でのどのような軌跡を描いて有限の生を全うしたかという問題を、佐久間

象山の私塾の場合を事例に、学習遍歴や中央・地方における進路と活動展開の追跡調査を通して分析している。その前提となる基礎的研究としては、拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」(日本歴史学会『日本歴史』第五〇六号、平成二年)などがある。

- (3) 緒方富雄を代表として昭和二十九年(一九五四)に発足し、昭和戦後の蘭学研究を本格化させた「蘭学資料研究会」の膨大な研究成果(復刻版『蘭学資料研究』附巻「総目次」、龍溪書舎、一九八七年を参照)、さらに同会を継承発展させた「日蘭学会」の研究成果、あるいは有坂隆道を代表とする「洋学史研究会」による『日本洋学史の研究』の刊行、末中哲夫を代表とする実学資料研究会の研究活動、そして田崎哲郎を中心とする在村蘭学研究グループの研究活動など、これまでに蓄積された洋学(蘭学)研究の成果には膨大なものがある。

しかしながら、それらの研究成果を詳細に検討してみると、そこには医薬学関係や語学関係が中心的な研究課題となっており、西洋砲術や西洋兵学などの軍事科学に直接関係する研究成果は、その絶対数が少なく、傍系的位置に置かれてきたといつてよい。

- (4) 佐藤昌介『洋学史論考』(一九九三年、思文閣出版)の「まえがき」。
- (5) 古在由重「和魂論ノート」(岩波講座「哲学」の第十八巻『日本の哲学』、一九七二年、同書一九五頁)。なお、この古在の論文は、後に同名の単行本として刊行された『和魂論ノート』、岩波書店、一九八四年)。
- (6) 田崎哲郎『在村の蘭学』(名著出版、一九八五年)の「あとがき」。なお、洋学史研究の再検討を提起した同氏の「洋学論構成試論」(初出は岩波書店『思想』第六六五号であるが、『在村の蘭学』にも再録)も一読に値する知見が示されている。

- (7) 幕末期における教育近代化の指標の一つとして幕府諸藩立学校への洋学の導入現象を早くに指摘したのは、戦後日本の教育史学会をリードし

た石川謙(『日本学校史の研究』、一九六〇年)をはじめとして、尾形裕康(『西洋教育移入の方途』、一九六一年)や笠井助治(『近世藩校の総合的研究』、一九六〇年)などであった。

石川は、『日本学校史の研究』の中で「洋学科や西洋語学科がくつきりした姿をとって藩校内に座を与えられたのは天保・嘉永期であり、盛んに普及したのは安政から明治へかけてのことであった」(同書四十四頁)、「幕末になって、一方では開港・攘夷の政事論争がわき立って、西洋の海軍力と対決する準備を痛感するにつれ、他方では徳川幕府が威力を失って、国内に動乱前後のような焦燥と不安が増すにつれ、どこ藩でもまず武力をととのえ、その武力も中心を西洋砲術と洋式教練とにおく、という方向に大きく傾斜していった」(同書四八五頁)と述べている。

また笠井助治は、「外辺警備の必要は、西洋砲術、西洋学術の導入の機縁となり、ために蘭学を一歩前進せしめた広汎な諸種の西洋学術を包摂する洋学なる一科目が、維新直前直後の興隆を見、進歩的な諸藩競って洋学を採用するに至ったが、このことは藩校に於ける封建的な狭い儒教主義の教育から、近代教育、より広い近代的人間の形成への黎明と考えられ、次いで来る近代学校への前提とみるべき」と述べ、さらに「わが国西洋の学は、まず医学に入り、次いで兵学に入ったといわれるが、藩校の教科に於てもその通りで、幕府の禁令に触れないで、しかも実学の立場から、先ず人生にとって最も重要な個々の生命を預かる医学に、次いで外艦来航による海防武備の必要の緊迫は、西洋砲術、兵学の研究を急速に促進し、これに伴って、天文・地理・暦学などに及んだ。」(笠井論文「近世藩校教科としての医学科・洋学科」、『福井大学学芸学部紀要』第六号に収載。後に『近世藩校に於ける学統学派の研究』(下巻)に所収)

- (8) 教育史研究において幕末期の軍事科学系私塾の教育的展開に注目した

研究成果が示されるようになったのは、筆者が昭和五十六年（一九八〇）に静岡大学で開催された教育史学会第二十五回大会で「幕末期における『東洋道徳・西洋芸術』の教育的展開―象山の西洋砲術塾の実態分析を事例として―」を発表して以降、近年になってからのことである。

その代表的なものとしては、海原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、一九八三年）と倉沢剛『幕末教育史の研究』（全三巻、吉川弘文館、一九八三―一九八六年）である。前者の海原の研究では、近世私塾の一環として「軍事学としての蘭学」を扱い、その中で筆者が昭和五十六年十月の教育史学会第二十五回大会で発表した佐久間象山の西洋砲術塾の分析結果と全く同じデータを用いて、幕末期の軍事科学系私塾についても叙述している。また、後者の倉沢の場合は、幕末教育史の課題を「幕府の教育政策と諸藩の教育政策」と捉えて、幕末期における幕府諸藩の学校教育改革の政策展開過程を追う中に、軍事科学関係を含めた洋学関係の導入という近代化への動向を位置づけて叙述している。

(9) これまで筆者は、学際的研究課題と考えられる幕末期の儒学的洋学受容論の成立展開過程の分析を教育思想史研究を中心としながら進めてきた。前掲の拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」や「明治初期日本近代化を巡るドイツと中国の歴史的位置」（『教育新世界』第三〇号）、「『米百俵』に描かれた小林虎三郎の教育的思想世界」（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（『創価大学教育学部論集』第二十九―三十一号）などは、叙上の視座からアプローチした研究成果の一部である。

(10) 『宇都宮氏経歴談』（明治三十七年、交詢社）、同書の二十四頁。
 (11) 高島や江川に関しては、史料集や著書・論文等の類が明治以来、多数刊行されてきた。膨大な数に上る故に、ここでは具体的にあげない。詳細については、法政大学文学部史学研究室編『日本人物文献目録』（平凡社、一九七四年）や日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧』（日外アソシエーツ、一九八四年）などを参照されたい。なお、吉川弘文館の人物

叢書『高島秋帆』『江川坦庵』の巻末には、近年における先行研究の代表的な成果がリストアップされている。

だが、下曾根の場合は、管見の限りでは、笠原一晃「嘉永年間の西洋砲術―下曾根金三郎の周辺」（蘭学資料研究会『研究報告』第一七六号）のみである。他には『東京市史外編 講武所』（東京市役所、昭和五年）や佐藤昌介『洋学史研究序説』（岩波書店、一九六五年）等では、わずかに触れられている程度であり、しかも下曾根の西洋砲術塾の実態に関しては全く不明である。

(12) 前掲『福沢諭吉全集』（岩波書店）第一〇巻、二五二頁。

(13) 西村先生伝記編纂委員会編『泊翁西村茂樹傳』（上下二巻、一九三二年、日本弘道会刊行）同書上巻、二九―三十頁。

(14) 日本オリンピック常任理事や鉄砲史学会理事など、戦後日本の銃砲関係の重鎮であった安斎實の研究書『砲術家の生活』（雄山閣出版、一九八九年）、四十八頁。なお、同書の巻末には、幕末期の西洋砲術界に多くの読者を与えて大きな影響を与えた貴重な西洋砲術関係の図書である市川兼恭訳『増補 遠西武器図略』（嘉永六年刊）と中村喜一郎著『西洋兵学訓蒙』（安政四年）の二書が文献資料として復刻収録されている。

(15) 前掲の田崎哲郎『在村の蘭学』、また同氏が研究代表者となってまとめられた『在村蘭学の展開』（思文閣出版、一九九二年）をも参照。なお、注目すべきは都道府県や市町村など、全国各地の地方公共団体が刊行した地方（教育）史書の類であり、そこにも幕末維新期における洋学の地方（地域）への展開の実態が示されている場合が多い。